

---

# 花を摘むひと

樹歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花を摘むひと

### 【コード】

N8991H

### 【作者名】

樹歩

### 【あらすじ】

ある日突然彼が姿を消した。あんなに一つだったのに。納得できずに彼を待つ私。ふとしたことで彼の居場所を知った私は長距離列車で会いに行く。でもそこにいた彼は私の知らない彼だった。・・・一人の女性の生き方、愛し方を中心に誰かを想う尊さを描いています。お読みいただければ幸いです。

## 第1章・追憶その1（前書き）

「まぼろしの跡」を読んでくださった方、そして初めて私の小説に訪れてくださった方・・・本当にありがとうございます。こうしてまた新たに連載小説を始めることができました。メッセージや評価、質問などもぜひよろしく願います。お返事必ずいたします。樹歩

## 第1章・追憶その1

夜行列車はまるで行き先などもはや忘れてしまっているかのよう  
に暗い夜道をひた走る。線路の軋みで目を覚ました私はあちこちの  
身体の痛みをほぐす為にまず首をのばし、次に腕、手指、そして膝、  
足とゆっくりと全身を伸ばした。

まだ夜明けは来ない……。遠くにぼんやりと外灯が見えるが、  
それが何を照らしているかは車窓からは確認できない。

フー……。ため息をつく。またつく。そのたびに思う。私はなに  
をしているのかと。何の為にこうして何時間も列車に揺られてまで  
そこへいくのか。何があるというのだ？誰も待っているわけじゃな  
いの。

そこへ行くのは今日が2度目だった。1度目は先月。正直逃げる  
ように帰ってきた。目の前の現実を理解することができず、理解で  
きるようになってもそれを否定して。こんなことなら何も知らない  
ままだった方がよかったと思った。それまで、何でもいい、どんな  
に小さい情報でもいいと思っていたのに。いざわかった時に自分が  
求めていた結果と違っていているだろうことを、全く予想してなかつた  
わけじゃなかった。でもこれだけ違ってしまうと、私が知っていた  
ことと今回知ったこととどちらが先でどちらが真実だったかもわか  
らなくなる。実際にわからない。そしてそれを今どんなに考えても  
確かめるすべさえない。

私はもう一度眠りにつこうとした。まだ朝まで間がある。・・・  
頭を預けられるところがあればいいのに。列車が大きく揺れるたび  
に首が左右に揺らされて、だいたいそれがもとで起きてしまう。今  
度は長距離バスにしようか。そんなことをふと思い、同時にまた自  
分は同じことをすることを決めているみたいだと思つて、小さく口

許だけ薄ら笑いを浮かべた。

この列車は本当にそこへ私を運んでいるのだろうか。なんだかこのまま闇に消えていつてしまっても誰も気づかないんじゃないかな。きつと外から見るこの列車の車窓の灯りはまるでそこだけが「旅」で、傍から見れば非日常的な光景に見えるのだからな……。私はそんなことを思いながら目を瞑り、今私が向かっている、誰も私を待っていない、誰も私を知らないその白い壁を思い描いた。

彼が私の前から忽然といなくなったのは、もう3年も前のことだった。ある日突然、そこに彼がいたことなどなかったかのようにその人はいなくなった。痕跡さえなかった。

私は彼がわざとそうしていなくなったことに最初気がつかなかった。何かの偶然が重なって（よく考えればそんな偶然は何もなかったのだけど）、たまたま連絡がつかないだけだと思っていた。そして何の手がかりもなく、阿呆のように電話を待っていた私だったが、さすがに3ヶ月を過ぎた頃には自分が捨てられたことを思うに至った。そして気がついた。これはあらかじめ決められてた別れだったのだと。少なくとも彼にとっては。だからだと思う。私はその人と丸1年近く付き合っていたのだが、彼の名前以外何も知らなかったのだ。彼の名前と小さなアパート。知っているのはそれだけだった。勤め先も、どこ出身かも知らなかった。彼は今どき携帯電話さえ持っていないかった。そうやって彼と私は別れて（正確には彼にとっでは別れて。私はそれを認めていない）、月日だけがうやむやに流れた。だけど私にはどうしても信じられなかった。私にわざと捨てられたことを。彼にとって私にただのかりそめの存在だったことを。どうしても。

別に私は特別いい女じゃない。街を歩いていても振り返られることなどないし、びっくりするほど不細工とは思われないけれど（実際そんな人は滅多にいない）どちらかといえば目立たない方だ。でも

だからといって簡単に騙される方だとも思わない。

いや私が言いたいことはそういうことじゃない。私と彼が過ごしたことを根拠に私は、私と彼がその時本当に一つだったと思ってるから・・・だから私は彼が一方的に私の前から姿を消したことを「捨てられた」という表現にしたくないのだ。こんな状態になって再会しても。彼の中に私がいなくなってしまうっていても。

## 第2章・追憶その2

彼と私が出会ったのは夜中のコンビニだった。今から6年前。まるで週刊の安っぽい漫画のような出会い方だ。しかもおでんの具が一つしかないのを譲り合っただけで、かきつけという陳腐さだった。

寒い夜だった。もうあと3日、11月に入るくらいだったと思う。残業を同僚から押し付けられて、渋々帰った。うんざりする残務をこなしながら、私はずっとおでんの大根のことを考えていた。温かいおでんの大根に、からしをたっぷり乗せて食べたいと思いつつ、ながらパソコンの画面とにらめっこをし、自分が一人部屋に帰ってから実際にその大根を食べながら缶チューハイを飲んだところを想像した。

会社から2つ目の駅で私は降りる。最初は自転車で通勤してたのだが、あることをきっかけに電車に変えた。空は深まる秋を象徴するような星空だった。駅の前のコンビニにいつものように入っていく。この時間に勤務している店員とは既に顔見知りになっていた。一人暮らしにも慣れた。母親と暮らしていた家から逃げるようになってきて2年以上がすぎている。

缶チューハイを取りレジに向かう。おでんの湯気が私の胃を一気に締め上げる。と、そこへ一人の男性が半ば割り込むように私の前に入ってきた。ちょっとムツとしたけれど、まあ、仕方ないかと身を引いた。そんなことに腹を立てることもできないくらいクタクタだった。

「おでん。コンニャクと、卵と、はんぺんと・・・」  
と声が聞こえる。なんだ、こいつもおでんか。そう思いながら私は彼の後ろに立っていた。もうひとつのレジから店員が「2番目にお待ちのお客様あ。」と声をかけてくれたが、それと同時に私はその店員におでんの方へ指をさして意思表示をした。顔見知りの店員は

「なるほど」という顔でうなずいた。

「大根も。二つ入れて。」

「すみません、大根一つしかないんですが。」

え？

「じゃあ一つでいいや。」

えええ？

「ちょ、ちよつと待って。」

その会話を聞いた私は、思わず間に割り込んだ。

「あ、あの、大根私も欲しいんです。」

「は？」

彼は私の言っていることを一瞬理解できない顔をした。あわてて店員（こちらも顔見知り）が

「お客様、すみません、さっき大量に売れてしまつて。今追加を入れたばかりなのでちよつとまだ売れないんです。」

と私をたしなめる。が、私はそれを無視して彼に言った。

「あの、お願いします。今日だけでも大根食べたいんです。」

その為に残業頑張ってきたんです。」

言いながら自分でも無茶を言つてると思った。私ってバカ？いつもはそんなこと絶対しない。だけど今夜だけはなんだかどうしても大根が食べたかつた。でも彼は

「ん〜・・・悪いんだけど、俺も今までずっと外で頑張つて働いてたわけ。おでんの大根を思い浮かべながら。」

「で、でも・・・」

反論しようと思いつつもその一方で「外で頑張つた」という言葉が引っかかった。私も頑張つていた時間、この人も頑張つていた。私は空調のある室内だけこの人は外仕事なんだ・・・。

「だけで譲るよ。」

「え？」

「ここで女性の申し出を無視してたかが大根1個を奪うのはカッコ悪い。いいよ、大根は君に譲ろう。」

そういうと彼は困った顔をしている店員の方へ顔を向けて「じゃああと・・・」と言葉をつなげた。それを聞いた途端、私は自分ごとつともなく恥ずかしくなってきた。イヤだ、大根なんて明日だって食べられるのに・・・。

「あの、すみません、大根、こちらの人に入れてください。私はいいので。」

「またもや私は彼と店員の間割り込んでそう言った。」

「ご、ごめんなさい。失礼しました。」

私はそれだけ言い放ち、持ってた缶チューハイをあわてて冷蔵コーナーの棚に戻し、そのままコンビニから飛び出した。

### 第3章・追憶その3

もう一軒のコンビニに行けば済むことだった。でもその店は私のアパートとは反対方向だったし、何よりその晩はとことん疲れていた。もういいや、今夜はお風呂だけ入って寝てしまおう。・・・思いながら足を速めた。

「おい、ちよっと待って。待ってよ。」

どこからか声が聞こえる。酔っ払いか？と、急に私の中に不安が広がった。性格に言うと思いだした。一度だけ私はここでとても怖い思いをした。狙われるという恐怖。私は胃が縮みあがり、すぐのど元まで来ているような感覚に襲われ、でも足はもつと速めた。鼓動が動悸に変わる。

「あ、あの、君。・・、大根の、き。・・み。・・」  
え？大根？

私は思わず振り向いた。少し向こうにさっきの彼が小走りに走ってくる。びっくりして足を止めた。彼は私の前に立つと、はあはあと息を整えた。

「歩くの。・・早いね。・・。」

「あ、あの。・・。」

「ほら、これ。」

そう言っただけは小さなコンビニの袋を私に手渡した。

「え、これ。・・？」

「大根。」

「いや、あの、さっきはすみませんでした、あの、本当にいいんで私。」

「ただど食べたかったんだろ？」

「いや、あの、そうだけど。・・。」

「あんなに切実に食べたがってたじゃないか。」

「いえ、本当にごめんなさい。私。・・。」

「いいから、ハイ、受け取って。俺もう帰りたいし。」

彼はそう言っただけで私の手を取ると、無理やりその袋を握らせた。重さでわかった。その中には缶チューハイも入ってる。

「じゃあ。」

「あ、あの・・・、」

私の声が届く前に彼は後ろを向いてまた走りだした。

「ちよつ、あの・・・、」

もう追っても追いつかない。私は半ば茫然として彼の後姿を見ていた。が、ハツと我に返ってもう一度袋の中を見た。

「・・・おでんを入れるプラスチックの容器。缶チューハイ。私  
が持ってたもの。」

暗い部屋に一人帰る。もう一人暮らしには慣れたけど、この暗い部屋に帰ることと電気をつける瞬間の緊張には慣れない。そそくさと靴を脱ぐ。テーブルには今朝広げていたままの化粧品やら鏡やらが置きっぱなしになっている。そこへついさつき見知らぬ人からもらったおでんを置き、そのままへたり込む。ハ・・・、今日も一日長かった・・・。時計を見る。時刻を確認してうんざりする。せめて6時間は寝たいと思う。思うのだが・・・。

気を取り直し、浴室へ行って浴槽に湯をためる。勢いよく水道から湯が溢れ、その様は私を一瞬和ませる。あ、と思う。今夜はもっと私を癒すものがあるのを思い出した。部屋へ戻りテーブルの上のビニール袋からおでんと缶チューハイを取り出す。

おでんのふたを開けるとこちらからもまったりと湯気が上がった。「おおっ、」と思わず声が出る。よく見ると大根とさつま揚げも入ってる。

「・・・どうしよう。でもせつかくのお心遣いだ、ありがたく頂こう。缶チューハイを開け、まず一口を喉に流す。この瞬間の為に働いてると言っても過言ではないのではないか、と思う。」

缶チューハイを半分残し（おでんはすでに私の胃の中）、お風呂に入った。湯に身を沈め、大きく息を吐き、手足を伸ばすフリ（なぜフリかと言うと、手足を伸ばせるほど浴槽が広くないから）をして天井を仰ぐ。

「あんなに切実に食べたがってたじゃないか。」  
そう、私は今夜切実に大根が食べたかった。もしかしたら生理が近いのかな、と思うくらい。けど見も知らない人にあんなに親切にする人初めて……。親切というか、変わってるというか。もつとよく顔を見ればよかった。どんな顔をしてたっけ？ 思い出せない。でもまだ若い人だった。自分とそんなに変わらないんじゃないか？  
……  
……あんな人も世の中にはいるんだ。

そう思うと、なんだか嬉しい気分だった。今日おでんの大根を食べた人が全世界でどれくらいいるのかわからないけど、私が食べたおでんの大根が一番美味しかったはずだ。

「もつとゆっくり味わいながら食べればよかったかな。」  
独り言を言い、気がつく小さく鼻歌まで口ずさんでいる自分だった。その晩、私はいつもより短い時間ながらも、ぐっすりと眠りの底に落ちていった。

#### 第4章・追憶その4

私はまた独りになってしまったのだと気づいた後でも、私はやはりどこかで彼と自分が一緒にいるような心地がしていた。それぞれ今立っている立ち位置が離れているだけで、彼が私を忘れてしまうはずなど絶対ないと。

時々思う。人は人生でどれくらいの異性（もちろん同性の人もいるでしょう。）と出逢う確率があるのだろうか。その人その人で違うのは当たり前だけど、そういうことではなくて、本当にのちの人生を揺らぐほど影響を残す出逢いにどれくらい巡るのだろうか。そんな出逢いはかなり稀有なはずだ……。

私にとって彼はまさに稀有な人であり、それは彼にとってもそうだったと……それは今でも確信がある。この事態でも。でもそれは誰も知らない。彼以外は。今、私がどんなに大声で彼への気持ちを抱きかかっても、それは絵空事にしかない……誰にとっても。そしてその“誰”の中には彼も入っている。

……どうしてこんなことになったのだろう。私は頭を線路に軋みに合わせて揺れる座席にもたれながら窓の向こうの暗闇を見つめてまたそう思った。

私の稀有な人。私の凍てついた心を溶かした唯一の人。那智。でもあなたの中に私はいない。どこにもいない。あの日、三年ぶりにあった彼の私を見る目は他人を見るより遠い目だった。他人、という意識さえない。人ごみの交差点でたまたま同じ青信号で横断歩道をわたる時すれ違った通行人くらいだろうか。いや意識そのものがないのに、それにさえ気づくはずもない。

おでんのお礼をしたくて次の日私はそのコンビニへ行った。その

日は残業がなかったので一度アパートに帰り、昨日とだいたい同じ時間を見計らって。彼は汚れた作業着を着ていて、外で仕事をしている。それしか知らなかったけど、どうしてももらったままにするのが嫌だった。もしかしたら“親切”というのが珍しくなった日常にふつと舞い降りたそれを、私はもう少しはつきりとしたものにしたかったのかもしれない。今となってはわからないことだが。そんなに深く考えてなかったかもしれない。

でもその日は彼に会えなかった。私は店員と顔見知り（しかも夜遅い時間のバイトはだいたい同じ顔ぶれ）なので、昨夜のことを詫びた。

「お姉さんのこともびっくりしたけど、あの兄さん、あのあとおでんを二つの袋に分けてすっ飛んでったからそっちの方が驚いた。」と彼は笑った。「やっぱりお姉さんを追いかけたんだね。」

「あの人、毎晩来る？お礼したいの。」

「毎晩は俺は見えないよ。来る時間もまちまち。」

「どこで働いてるかなんて知らないよね。」

「さすがにそれはわからないっすね。」

「そう・・・」

「あ、でも、この近所のはずっすよ、現場。たまに夜中2回来るから。仕事中だって。」

「そう。」

それを聞いたところで大した情報ではなかったがなによりマシだった。私はその店員に私が大根をとでも感謝して是非お礼をしたいと言ってた、と伝えてほしいと頼りない伝言を頼んだ。

最終的には私はコンビニに通うこと5日めにやっと彼に会うことができた。それは私が駅を出てきてそのコンビニの前を通った時、彼が中に見るのが見えた時だった。

「ああ。よかった。やっとお会いできて。」

那智・・・、彼の顔を見た途端私はそう言い、彼も私の顔を見た。目があった。

「ああ、君。気を使ってくれてたらしいね。よかったのに、あんなのどうでも。」

「そうはいきません。」

私たちは話しながらコンビニを出た。彼は煙草を買っただけのようだった。

「本当にいいから。その気持ちだけで十分だ。じゃあ。」

「ちょっと待ってください、それでは私の気持ちがおさまりません。」

歩きだした彼の作業着の上着を思わずつかんだので、彼はちょっと驚いたようだった。

「まだ仕事なんだ。」

「待ちます。」

「待ちますって・・・、何時になるかわからないよ。」

「・・・じゃあ、休みはいつですか？」

「休み？」

もつと驚いた顔をした。けどもう引き下がれない。何か私の中で意地になっている部分があった。

「あの、よかつたら、おでんでも・・・。安くておいしいとこ知ってます。」

「・・・ああ・・・。」

なるほど、という彼の心の声が聞こえるようだった。そして私たちは2日後の夕方に駅の前で待ち合わせをして別れた。

今思ってもどうしてあんな風に言えたのかわからない。どうしてあんな風に誘ったのかもわからない。おでんを一緒に食べに行くつもりなんてなかった。コンビニで少しのおでんを買って渡すくらいにしか思っただけだった。ただと思えばあれが出逢いだっただ・・・。

私と彼の。

外はゆつくりと夜中と夜明けのほんの一瞬の狭間を探してゆらゆらと揺れていた。私はまた眼を閉じた。瞼を閉じると那智が見えた。

あの出逢った夜、初めての約束をした夜、手を振って高層ビルのネオンの下を汚れた作業着で歩いていった那智。もしあのまま約束が実現しなかったら……。ううん、もしあのまま私が彼の言葉だけで引き下がっていたのなら……。いや、出逢うことさえなかったら……。何度も何度もこの問いを繰り返したのに。何度も何度も。そして今、こうしていても私にはその問いの答えの断片さえ見つかっていない。

## 第5章・追憶その5

「あの、ここです。」

おでんを食べる為に行った小さなお店は本当に小さなお店で、ご主人を亡くした奥さんが一人ではつんとやっている。実は私が“ちやんと知っている”唯一のお店だ。何年か前に、今は辞めていなくなってしまった同僚が連れて来てくれた店で、「女の子が一人で行っても大丈夫な店なのよ」と彼女が言っていた通り、一人で行っても居心地の悪くないこじんまりとしたお店だった。あるのはおでんとか煮物とか、あたかも田舎のお母さんの手作り料理。そしてご飯とお茶漬け。もちろんアルコールもあるが、種類は多くない。私は本当にほんの時々この店を訪れたが、いつ来ても奥さんは優しく私を迎えてくれた。こんな人が母ならよかったのに、と何度思っただろうか。

那智は待ち合わせの場所に待ち合わせた時間にほぼぴったりにきた。まじめな人柄なのだ、と思った。実は私もついたばかりで、もし彼が先に来ていたらどうしようかと（一応誘った手前先に着いてないといけないと思った）内心ひやひやしていたのだ。

「あの、電車に乗って次の駅なんです。」

「あ、そうですか。」

今思うと笑ってしまうのだけど、私たちは挨拶らしいこともなくそれだけ言って歩きだしたと思う。そしてそのあと一言も交わすことなく電車で並んで立ち、次の駅で降り、階段を昇って下って外に出て、店まで歩いてきた。彼は黙って私の少し（半歩くらい）後ろをついてきた。おそらく彼も私と同様にこのシチュエーションをどうしようかと思っていたに違いない。

私自身、他人と、しかも男性と食事するなんて何年振りかと思うくらい久しぶりのことだった。思わず勢いに任せて誘ってしまった

が、それさえ初めてに近い行為で、今日はずっとどうしようどうしようかと焦っていた。何を話したらいいのか。何を着て行こうか。変な女だと思われないだろうか。欲求不満な女とか思っただろうか。そういう不安がぐるぐると回っていた。それでも不思議だったのは、彼が私のすぐ後ろに居ることがなんだか心地よい感じがしたことだ。安心感というのだろうか。何か、あたたかいオーラみたいなものがあった、それに包まれているような感じがした。見守られている感覚があった。

店はまだ開けたばかりのようで客は誰もいなかった。奥さんは私の顔を見ると「おや？」という眼をしたが何も訊かずにいつものように「いらっしやい。」とだけ声をかけてくれた。

「お、お久しぶりです。」

私がそう言つて座ると彼も自然に隣に座った。今私は「自然に」と書いたが、それは本来当たり前だとは思ふ。一緒にいるのだから。でもそれは本当の深い意味では「当たり前」ではないと思つてゐる。自然な行動とか言葉というのは、ある一定の関係を築けた上に成り立つものであつて、そこまでたどり着いていない相手とはなにかしら摩擦というか、無理のある仕事や言い方になるのは避けられないというのが私の持論だ。それを一般的には“気遣い”という言い方をする。でも彼の動き方、たとえば椅子の引き方とか、腰の下ろし方とかにそれがなかった。少なくとも私にはそう映つた。それは実は私をかなり感動させた。思はず彼を見つめてしまふくらいだった。こういうことにこだわるのは女性だけかもしれないし、あるいは私だけかもしれない。とにかくその時の那智の椅子の座り方はとても自然だった。そして私は一気に自分の中の緊張感や不安が薄らいでいくのを感じた。

「この前は本当にスミマセンでした。あの、美味しかったです。」

「スゴイ食べたそうにしてたもんね。」

「ここのもとても美味しいので・・・。」

そこへ奥さんが「とりあえず何か飲みますか？」と声をかけてきた。私たちは生ビールを頼んだ。すぐにビールが運ばれて、それを見た途端、なんだかすぐくわくわくしてきた。

「じゃあ、乾杯。」

「乾杯。」

小さくビアジョッキを当ててそのまま喉に流す。美味しい。そしてジョッキを置いた時、彼は言った。

「ところで君の名前はなんていうの？」

## 第6章・追憶その6

私は割りばしの入っていた袋に小さく自分の名前を書いた。ほとんどというよりは絶対一度で読んでもらえたことのない名前。

“小鳥遊 心漣”

「……名前は読めないけど、名字はわかった。」

「本当？」

「うん、多分。たかなしさんだね。」

その晩を境に私たちは急速に親しくなっていた。彼は25歳で、秋田から出てきて3年になるとのことだった。高校を出て地元の会社に就職したが、どうしても一度は都会に出てみたいという気持ちは抑えられず22歳の時に上京。地元で大工の修業をしていたことを生かして小さいながらも建設会社に就職、今に至るのだと。

「でも思ってたより都会なんかすぐに飽きたよ。どこを見ても同じ景色。田舎の方がよっぽど色がある。彩りいろどりって言うのかな……、季節が変わったこともちゃんと自然を見てわかる。都会こうちはダメ。女性の洋服で気づいたりする。」

私もポツポツと自分のことを話した。父親がいないこと。高校を出てからずっと一人暮らしだということ。小さな会社で事務ということ。よりは雑用係みたいな仕事をしていること。21歳だということ。

三回目に会った晩、私たちは私のアパートでひとつの布団にくるまった。本当は私はすでに二度目に会った時、彼にその身を預けたと思っていた。恋と呼べるようなはつきりしたものではなかったし、女から誘うようなことはできないと、今思うと鼻でせせら笑ってしまふような恥じらいがあった。でも彼に明らかに好意を持って

いた。

那智はそんな私の気持ちを何気なく気づいてたかもしれない。三度目に会った晩、食事をしてから夜の街をとぼとぼと歩いていたら私たちはどちらからともなく身を寄せ合い、いつのまにか手を握り合っていた。私はそのまま自分のアパートに彼を連れて行った。那智は何も言わなかった。そして私たちはお互いの肌を重ね合った。

「ミレイ……。」

「何？」

「……いや、なんでもない。」

気づかれたか？と思った。でもそうではないようだった。全て終わった時、彼はちよつと驚いたようにいった。

「初めてだった？」

私は無言の返事を返した。ただ彼の胸に顔をうずめて、彼の腕枕に自分の耳やら頬やらがくつついてることが幸せだった。そして思った。これは恋だと。私はこの人を愛し始めていると。那智はずつと私の髪を撫で、時折その手を背中まで伸ばした。やさしい、柔らかい、あたたかなその指先は私にとって永遠だった。

私は処女だった。今時、といつても今からほんの数年前のことなのだけど、その頃だってハタチ過ぎて処女なんてありえないという感じだった。でも私は処女だった。

今でも忘れられない。私が高校生だった頃つきあつた男の子がいた。私たちは中学校からの同級生だったが、選んだ学校に同じ中学出身の子が少なく、クラスでは私と彼だけだった。それをきっかけに私たちはよく話すようになり、次第にお互いを恋愛対象として意識してきて、高校1年生の冬にいわゆる“つきあう”ようになった。

仕方のないことだと思うのだがこの年頃の男の子はいつも女性の身体のことばかり考えている。遊んでる子に限らずどんなにまじめ

な子も。男の子はだいたいそうらしい。今の私ならそれがわかる。でもその頃の私は男の子の生理にとても無知だった。

つきあうようになってしばらくしたある日、私と彼は二人で下校して何となくぶらぶらと歩いていた。気がつくと彼がなるべく人気がない方へない方へ歩いてゆくように見えて、私は疑問に思いながらもそのまま一緒に歩いて行った。なんだか寂しいところだな、駅まで戻るの大変になっちゃう（私はバス通学だった）・・・そう思っていたらいきなり彼が私に抱きついてきた。

「え？」

と思う間もなかったが同時にこの為にわざわざこんな所へ歩いてきたのか、と理由も納得した。その男の子は頭のいい、賢い人だったので、無駄なこととか遠回りとかをしない合理的に動く人だったからどうしてこんな歩き方をするのか不思議だったのだ。

彼は私が抵抗しないとわかると今度はキスをしてきた。正直私はびっくりした。つきあってまだ数週間しかたっていないのに、思った。多分“それ”も遅い考えなのだろうけど私にとってはまだまだたく心の準備ができてなかった。もちろん私はその男の子をとても好きだった。いつかそうなってもいいと思っていた。でも実際はあまりに突然で唐突で、こちらの気持などおかまいなし、のような感じがした。それでも私は抵抗しなかった。彼に嫌われたくないという気持ちと、やはりどこかに好奇心があって、私は私の知らない未知の自分を見てみたいという気持ちがあったのだ。

## 第7章・追憶その7

私は今その“彼”のことを、“彼”とか“男の子”という言い方をしている。でもそれは私がその人に名前を忘れてしまったからではない。私はその“彼”の名前をちゃんと憶えている。漢字でどう書くかも。もちろんローマ字で書いた時のスペルも。だけどどうしても名前を言いたくない。口にしたくない。

彼としたキスが私にとってはファーストキスだった。

普通の女の子が夢を見るように、私にも私なりのキスに対する小さな夢があった。秋の夕暮れ落ち葉の沢山ちりばめた街路樹の下とか、冬、外は雪景色が見えるあたたかな部屋とか。または・・・（キリがない）。でも実際はずいぶんあつけないものだった。夢も希望もあつたもんじゃなかった。

「私のファーストキスは学校帰りのこんな汚い路地裏でしたんだ。」そう思うと悲しくなった。夜はこのあたりは飲み屋が多いからだろう、道路のあちこちになんだかわからない浸みこんだ液体の跡やら、ゴミのくずやらが目についた。ふと見ると野良猫が何匹もあちこちらで寝ていたり。私はがっかりした。心からがっかりした。でもきつとこんなもんなんだ、と諦めることにした（というか諦めるしかない）。

それでも私はこれでまた彼と一歩近づけたんじゃないか思った。恋人、そういう言葉を初めて意識した。それは16歳の女の子には十分刺激的だった。

それから彼は一緒に帰ると必ず私とキスをしたがった。正直、その為に私と帰るのかと思うくらいだった。彼は毎回わざわざ遠回りをし、人気のない方へ私の手を引いて行き、周囲をちらっと見て大丈夫だと確かめると急に抱きしめてキスをしてきた。その間会話

はあまり成り立たなかった。私が何か話しかけても、うわの空の返事が返ってきた。

私は彼のことをとても好きだったけど彼のそういう所に疑問を感じ始めた。つまり、“その為の私なのだろうか？”という気持ちが大きくなっていったのだ。それは最初小さい綻びはじまりだったけど日を追うにつれて大きくなっていった。多分あまり時間もかからなかったと思う。そして私の気持ちと裏腹に彼の行動はエスカレートしていった。キスで満足できなくなってきた彼は、そのうち私の身体を触りたがった。長いキスをしながら背中にもわした手がだんだん胸の方へあがってきたり、腰の方へ下がってゆくの私はびくびくしながら気づかないふりをした。気づいたことを相手にわからせることで「OK」という意味にすくなかったのだ。時に人は自分の思いが強いと、相手も同じ気持ちだと思いこみ、自分の都合のいい方に考えてしまう。

何度も言うけれど、私は彼のことを好きだった。とても好きだった。ただ心の準備ができなかっただけ。彼もおそらくそうだったのだと思う。きつと本当は簡単に女の子の身体に触れていいとは思ってなかっただろう。でも彼自身どうにもならなかったのだ。16歳の男の子の性欲はそれこそ津波のようなものだったのだろう。

だけど私にも私の事情があって感情があった。無知な私は、彼のその行動を理解しようと思うゆとりがなかった。彼のキスを何とか受け入れても、その先のことまではどうしても許せない。一度許してしまうときつと止め度がなくなると思った。お互いが一気に流されていくだろうと思った。それはきつと想像以上に私を傷つけるだろう、私にはその確信があった。深く深く傷ついて、でも同時に私も彼に溺れてゆくだろうと。快感というのはそういうものだ。それに私はその頃妊娠についての知識も全くなかった。授業で習う、世間に出た時全く役に立たないことすら頭になかった。だから怖かった。

彼はやがて休みの日に自分の家に来ないかと誘ってきた。さすがの私もなぜ彼がそんなことを言うのか分かった。私は断った。その日は用事があると行って。また彼は誘った。また私は断った。二度目、やっぱり私が断わった時、彼は不機嫌になった。急にゴニョゴニョとこちらが聞き取れないくらいの声で何か口汚いことを言っているのがわかった。明らかに怒っているのがわかったけど、私にはどうすることもできなかった。

## 第8章・追憶その8

それからしばらく彼から一緒の下校も誘われなくなった。無知な私は淋しく思いながらも二人の間にはちよつと冷却期間もあった方がいいと思つて、あまり気にしなかった。しかもその間にテスト期間に入つてしまい、同じクラスだといつても話す機会がなくなった。“テストが終わつたら彼とゆつくり話そう。私の不安も聞いてもらえれば。”・・・私はそう思つていた。

テストが終わる日の朝。私が登校すると下駄箱の所に彼の姿が見えた。チャンス。今話しかけて、帰り一緒に帰れば。私は彼に近づこうとした。その時、ふと彼と眼があつた。でも眼が合つた瞬間、笑顔になろうとした私を打ち消すかのように彼はおもむろに視線をそらせ行つてしまった。

「え？」

何が起こつたかわからなかった。無知で独りよがりだった私は、自分さえ彼を好きでいれば彼はずっと自分を愛してくれていると勝手に思い込んでいたのだ（それがまぼろし以外の何物でもないことを私はその後思い知らされる）。

テストが終わつてHRが始まるのを待っている時、私はもう一度彼の方へ近づいて行つた。

「あ・・・」

その途端、彼はまたもやさつと席を立つてほかの生徒の方へ歩いて行つた。明らかに私を避けているのがわかつた。彼に声をかけられた男子もきよんとして彼と私を見渡した。多分私は青ざめていたと思う。彼氏に無視された恥ずかしさを通り越して、あり得ないことが起きたことを信じられなくて。

そこへ担任が教室に来たので私は自分の席に着いた。頭の中は真

っ白だったが、さすがに私も自分と彼の中がいつの間にか怪しくなっていることを理解した。でも何度も言うが、無知な私はそれがどうして起こったのかはまったくわからなかった。

帰り道、私は一人でしょんぼりと帰った。気が付いたらもう彼は教室にいなかった。・・・どうしよう。彼はどうして私を無視するのだろうか。嫌われた？でもなぜ？・・・そんなことを考えながら私はいつのまにかあの路地裏の方へきていた。

「イヤダ、何してんの、私。」  
引き返そうとした時、くすくすと小さな笑い声が聞こえた。女の子の声。そしてぼそぼそとした声が続いた。その声は聞き覚えのある声だった。

・・・どこから？私はその声の方へ近づいて行った。その声は通りからちよつと奥まった方から聞こえた。飲み屋街の方だった。昼間でも薄暗い。

・・・！！

「あ」  
そこには私の恋人と隣のクラスだったと思うが女の子がいた。二人は身を離し、女の子の方は私を見てあわててブラウスのボタンを止めようとしていた。

「・・・なんで・・・。」  
私の口から出た言葉はそれしかなかった。それを聞いた彼はふうーっとため息をついて

「というよりどうしてお前がここにいるんだよ？」  
と言った。今までそんな言葉づかいを向けられたことなかったので、それも信じられなかった。

「あ、歩いてたら・・・声が・・・。」

「なんでこっちのほうに歩いてんだよ。駅は向こうだろ？」

「・・・。」

ようやく無知な私も気がついた。私は嫌われたのだ。この人に。それでもこの言葉を繰り返した。

「どうして……。」

「もうとっくにお前とは終わったんだよ。」

「いつ？なんで？」

「はあ？だつてお前の方が俺を拒否してただろうが。」

「拒否？そんなことしてないよ、だつて……。」

と言いかけてハツとする。彼の誘いを断ったことを言っているのだと気づく。

「だつて、あれは、その……。」

「あのなあ。」

一瞬その周りの空気をすべて止めて彼が言った。

「男は触らせてくれる女の方が可愛いんだよ。触らせてくれてななほだ。」

「……。」

「身を預けてくれて、だんだん惚れていくんだよ。」

「……。」

「お前みたいな鈍感な女は要らない。」

「……。」

それだけ吐き出すように言うと、私の恋人だった男の子はその女の子の肩を抱きながら立ち去った。

男は触らせてくれる女の方が可愛い。

身を預けてくれて、だんだん惚れていくんだ。

その言葉は私に強烈なナイフとして刺さってきた。

## 第9章・追憶その9

自宅に着くとそこに母親の姿はなかった。ホッとすると同時にこらえてきた涙が一気にあふれだした。

私はただ泣いた。

好きだったのに。好きだと言ってくれてたのに。

“男は触らせてくれる女が可愛い。

身体を預けてくれたことで、だんだん惚れていくんだ。”

どうしてあんなにひどいことを言われなければならないのだろうか？人を好きになるのは心じゃないの？どうして彼は心じゃなくて身体が基準なの？男の人はみんなそうなの？

泣きながらふと今日もない母親のことを思い出した。私の母は一言でいえば男好きだ。今日もきつとどこかでデートしているに違いない。夫（私の父親だ、多分）を若くして亡くした母は私に隠すことなく色々な男性と逢瀬を重ねていた。父親（しつこいが多分、だ。母の性格を考えると時々疑ってしまう。でも確かめる勇気がない）が亡くなったのは私が小学校2年の時。母は35歳だった。母は幼い私に言った。

「心澄。お母さんは一生懸命働く。お前に不自由はさせない。でもね、時々帰りが遅くなるかもしれない。淋しいかもしれないけど、我慢できる？」と。

私は子供心に母親が父親の代わりも務めるのだと察知し、不安ながらもうなずいた。

あれから8年。母は確かに生命保険のセールスレディーとしてずっと働いてきた。父が残してくれたこの家を手放すことなく済んでい

るのがどれくらい大変なことか、高校生ともなれば理解できる。でも外で母が何をしているのかもちゃんとわかってしまふのだ。

男の匂い、とでもいえばいいのか。大人になった今ではそれがわかるのだが、当時（最初に漠然と気づいたのは小学校4年くらいだ）と思う。偶然自宅から出てくる男性をみてしまつてから。当然私はそれを母に言えなかった。）はそれに気づいてしまふ自分が嫌だった。それからどうして母は淋しさを娘の私で埋めてくれないのだろう、と思つた。

いつの間にかその孤独も、一人でする食事も慣れてしまつた。もう慣れてしまつた。だけど彼だけは違つと思つてた。・・・彼だけは。・・・彼だけは？

“男は触らせてくれる女が可愛い。  
身体を預けてくれる女の方が可愛い。”

どうして彼だけは違つと思つていたのだろうか。とたんに胸の奥で線香花火がはじく。小さな小爆発。私は本当に恋をしたのか？

そう思つたと同時に涙が止まつた。私は彼を本当に好きだつたわけじゃなかつた。「自分のもの」だと思つていたのが違つていたから悲しくなつただけだつたんだ。母親に対して期待できなかったものを彼に期待してただけなんだ。

それに気がついたことは思つた以上に私を傷つけた。自分は高校生にもなつてまともに恋愛感情も持てない、親にぶつけられない不満を、たまたま仲良くなつた男子で埋めようとしていて、しかもそれにも気づかなかつた阿呆だと。そしてそのことをあんな酷い中傷で身にしみなければならぬのだと。

あれから4年？5年？今でもその言葉は思い出すたびに私の胸を苦々しく締め付ける。それくらい思春期の女の子のトラウマにさせ

るだけの威力があつた。事実、私はそれから男性のことを信じられなくなり男性と付き合うことを避けてきた。でも私は決してあきらめていたわけじゃなかった。いつか自分の方から真実<sup>ほんとう</sup>の恋をしたいと思つた。自分の身体を預けてもいいと思つた人と恋に墮ちたいと・・・那智。あなたは私が自分から欲した初めてで唯一のひとだつた。ううん、今もそう。初めてで唯一の人。

## 第10章・追憶その10

那智が人付き合いを最低限しかしないことがわかってから、私は彼に対し親しさがより一層増していった。私自身、あまり人付き合いが得意な方じゃなかったからかもしれない。滅多に誰かと出かけることもなかった。男の人も知らなかった。でも那智だけは、もう私の中で家族くらいの存在だった。那智は男性だったけど、もし彼が女性であつても私は惹かれたんじゃないだろうか。とにかくすさまじいと言いやうのない勢いで私は恋に落ちていった。

那智は都会に出てきた経歴は話してくれたけど、ほかはあまり話したがらなかった。今思えば、私とそういう仲になってしまったから話したくなかったのだろうし、話すわけにもいかなかったのだろう。でも私はそんなことも気にならなかった。生まれて初めて本当の恋をしたのだ。見る空は青く、見る緑の葉はみずみずしく、夕焼けは自分の心のように紅かった。すべてが色鮮やかだった。それ以外に何を求めるのか。私は那智に会えることだけで満たされていた。彼を私に出会わせてくれたことを神様に感謝した。

那智のアパートは私のアパートから自転車で20分くらいの距離だということが分かると、それからは二人で外に出ることも極端に減った。彼には自転車がなかったので、私がつばら彼にアパートに出向くようになった。買い物をし、食事の支度をして、彼の帰りを待つ。那智が帰ると作ったものをあたたためて一緒に食べる。一緒にテレビを見て、一緒に眠る。

今思えば、那智は内心どうしたものかと思っていたに違いない。出逢って数回で寝たのはともかく、相手は今時21にもなつて処女お互いの家がわかつてからは当たり前のように家事をする……。私は一応、彼と約束した以外の日は彼のアパートに出向くことはしなかったが（そんなことをしたらそれはストーカーだ）、時々それをしたくなつた。一人暮しなんだから急に私が行っても困ることは

ないと思つた。でも職場で同僚から良く聞く男女の話から、男とは約束した以外はこちらの都合で動かない方がいいという教訓を得た。「男つてさ、女と会つてない時は基本的に自分の自由な時間なわけよ。まあ女もそうだけど、その精神状態が女より比率が大きいのよね。だから大概の男は、別にやましいことがなくても突発的に女が自分の前に現れることを戸惑うんだよ。」

私は男性との付き合いがなかったので、同僚の話をいづれ役立つ話と思つて聞き流すように聞いていた。でも「男は基本的には自由でいたい」という印象が私の中に強く残つた。那智と付き合い始めた時（今考えるとそれも曖昧だつた。私たちは何の言葉のやり取りもなく、寝たことでスタートしたようなものだ）、私が一番恐れていたことは那智に嫌われることだけだつた。

「那智だつて一人でいたいことがあるはずだ。約束した日はちゃんと早く帰つてきてくれている。私の気持ちの押しつけだけはやめよう。」

私は自分にそう言い聞かせた。21で、処女で、初めての恋人で……。私は自分に自信がなかつた。もしかしたら出逢つてすぐにも彼と寝ようと思つたのは、あのトラウマのせいかもしれない。でも那智の胸の中の居心地は私の想像以上にあたたかく、那智の腕枕はこれ以上ない安心感だつた。その感触を、あのトラウマから得たものとは思いたくなくなつた。那智が私を身体から愛したとは思いたくないのもあつた。

その時、私は仕舞い込もうとしている、漠然とした不安を感じていた。

「那智は何か決定的なことを私に隠している。いや、隠している自覚はないかもしれない。ただ、私にあえて話していないことがある。そういうものの存在を感じる。」

でも私はその不安を、初めて得た恋愛を失いたくない気持ちから来る勝手な思い込みだと思つた。思い込ませた。

## 第11章・追憶その11

それからの約3年間。私と那智は一緒の時を過ごした。週の半分はどちらかの（たいがいは那智の）アパートで寝ていた。私が那智の所から仕事へ出かけることも次第に習慣化していった。何度か私は彼に同棲したいことをごく控えめに伝えたことがあった。でもそのたびに彼は聞こえないふりというか耳に入っていないというか、それよりは耳という器官はあるのだけれどもそれが機能停止している・・・というのがしっくりくるような様子を見せた。もちろんまともな返事もなかった。私はもちろん釈然とはしなかったけど、先に書いたように私には漠然とした不安、那智が私に何か決定的に言わないと決めていることがあるという感覚があった。そしておそらくそのことと、私と同棲をしたくないこととは関係があると思った。だから私はそれ以上には突っ込むことをしなかった。

・・・蜜月。ところどころにそういう当てにならない綻ほころびがあつても、私は十分満たされていた。那智は私の那智だった。私は那智の私だった。私たちは普通の恋人の付き合いとはずいぶん違った閉鎖的な関係だったかもしれないけれど、でも私たちなりのささやかなお城があつたのだ。3年間、特に遠くへ行つた覚えもない。せいぜい電車で数個先の駅に行つてぶらぶらと散歩をしたりしたくらいだ。私たちは大きな市街より、小さな商店街の方を好んだ。日本と言う国が多分豊かになり、世界的経済大国と呼ばれるようになって、都会と呼ばれる街の中をちょっと外れただけで、それこそ路地一本外れただけで、小さな看板で慎ましく商売をしているお店がまだこの国にはたくさんある。そこには「何があるの？」と覗きたくなるような好奇心を掻き立てられる雰囲気があつて、でも言葉の要らないスーパーマーケットでの買い物に慣れていると、まずお店の

扉を開けることから勇気が要る。ガラス越しに見えるものが異国の距離に感じる。でも私と那智はあえてそういうお店が並ぶ路地を歩くのが好きだった。もっとも私は那智とならどこでもよかったのかもしれない。今思えば那智がそういう所を好きだった、と言った方がしっくりくる。もしかしたら那智にとっては都会の重圧感が窮屈だったのかもしれない。秋田から都会にちよつと憧れて出てきたけどすぐに飽きたとも言ってたくらいだったから。でもその割には彼は秋田へ引き上げようとはしなかった。実は私はそれをいつ言われるかとひやひやしていた部分があったのだが。

那智は俗に言う“盆・正月”には秋田へ帰っていた。でも一度も私を連れていこうとはしなかった。というか誘われなかった。帰省に誘われないことも私を不安にさせる材料ではあった。だけどとにかく私は沈黙を貫いた。何も言えなかった。私はただ彼の帰りを待つしかなかったし、でも彼は必ず帰ってきてくれた。帰ってくるたびに彼はいつも少し太っていて、でも田舎の様子を多くは語らずに……そして私を静かに抱いた。何度も頭を撫でて、何度も自分の身に私をくっつけて抱きしめた。

……今はわかる。あれは、あの行為で那智は私に謝っていたのだ。あの手は、指は、私に「ごめん」と謝っていたのだ。でもその頃私はそれに気づくことなく、那智のぬくもりが私に戻ってきたことだけで喜びの一色だった。充分だった。そんなふうにして、私たちの3年間は過ぎていった。

## 第12章・追憶その12

3年も一緒にいると、男女の仲もすっかり慣れ合いになってくる。まして私と那智は多分普通の（本当は“普通”なんてどこにもないんだけど）恋人の付き合いよりずいぶん閉鎖的だったし、それぞれに住むところがあつたとはいえ半同棲のような感じだったからなおさらだ。

その頃になるともう私は彼に結婚を期待しなくなっていた。何か事情があつて那智は私と結婚することはできないのだ、そう思っていた。だけどそのことを私は那智に詰め寄ることはなかった。最初は「できない」だったのが、いつか「しない」になっていた。那智は、結婚できるようになれば結婚する気であるのだ。3年経つても私たちはこんなに仲も良く喧嘩もない。私を抱くたびに彼は言った。「心漚、好きだよ。きみがいるだけでいいんだ。」その言葉だけで私は満たされた。身体の隅々まで洗われるようだった。

最後に那智に逢つた晩も彼は私の知ってる今まで通りの那智だった。私は那智の部屋で夕飯を作り彼を待っていた。彼が帰り、一緒に夕飯を食べ、お風呂に交代で入って、ひとつの布団で抱き合った。ただその夜のセックスはいつもよりもスローだった。彼は何度も何度も私に口づけをし、髪を撫で、首に鼻をつけた。「好きだよ。好きだよ。」と何度もつぶやいた。ひとつの行為から次の行為に移るまでに時間をかけていた。今思えば、彼は私の身体を彼なりに自分に刻み込もうとしていたのかもしれない。とても慈しみのあるセックスだった。私はその丁寧な愛撫に文字通り身も心も昇天していたと思う。あまりに幸せで、だから私は何も疑うことがなかった。

朝になり、私は那智に声をかけた。いつもそうしているように。彼を起こしてから自分も起きる。洗面を済ませ、昨日の残りのご飯（少し多めに炊く）をおにぎりにしておく。那智の朝ご飯だ。彼は

もともと朝食は食べない習慣が付いていたが私が用意しておいた時は食べる。それから自分も着替えて簡単に化粧をし出社する。

でもその日、会社へ持っていく予定になってたものを自宅に置き忘れたことに気づいた私は、一旦自宅へ戻ってから出社することにしました。

「那智、おはよう。私一度帰らないといけない。」

「う・ん？ そうなの・・・？」

那智はまだ半分寝ていた。

「もう起きないと。」

「・・・俺、今日休みなんだ・・・。」

「え？ 休み？ 平日なのに？」

「・・・現場自体が今日は作業やらないんだって・・・。」

「ふうん。」

この3年そんなことは一度もなかったが、まあそういうこともあるんだなど、私は特別気に留めることもなかった。そしてそそくさとして着替えをして、小さく彼の頬にキスをして静かに靴をはき、玄関を閉めて鍵をかけた。

彼の部屋は2階。私はいつも下に降りると彼の部屋の窓を見上げた。その癖はもうすっかり身についたものだった。彼もそれを知っていて、いつも私が帰ると窓を開けて見送ってくれた。照れくさいのか、彼は私のように手を振ることはなかったし声をかけてくれることもなかったけど、必ずほほ笑みを私にくれるのだった。

私はその日本当は急いでいたけれど、やっぱり立ち止まって彼の部屋を見上げた。すると寝ていると思っていた那智の顔がそこにあった。

「行ってくるね。お休み。」

私はそう言っただけのもののように手を振った。彼も多分、いつものように小さくうなずいてほほ笑んでいたと思う。そしてそれが那智と私の蜜月の終わりだった。その日の夕方、仕事を終えた私が夕食の

食材を持って彼のアパートへ行った時、そこには何もなかった。そして那智もいなくなった。

私が現実を受け入れるまでどれくらいかかったのか、それも今となってはわからないが、私はそれまでと同じように会社へ行き、つまらない雑用をし、誰とも付き合うことなく仕事が終わればさっさと自分のアパートへ帰った。那智がいなくなった最初の頃は毎日彼のアパートまで行っていたが、そのうち誰かがその部屋を借りるこゝとになったようなのでさすがに気まずくて行くのをやめた。私の生活から那智という存在だけがすっぽりとぬけただけだった。でもそれは私を喪失のどん底へ突き落としていた。聞いた話で、愛する人を失ったショックがあまりに大きくて許容範囲を超えると、精神的に病んでしまったり現実を逃避するようなことがあるらしいが、私もある意味そうだったのかもしれない。那智がいた、という現実から逃れようと私は極力彼のことを思い出さないように努めた。でもその一方で、ふと気がつくとき彼を歩いた商店街をふらふらとさまよい歩いたりしていた。

次に那智が私の前に現れたのは、どこにでもある平日のオフィスの昼休み。彼はテレビの中に唐突にその存在を私に知らせてきた。

### 第13章・悶える鳥その1

私はその時、会社の昼休みで一人のそのとコンビニで買ってきたおにぎりを食べていた。那智と出会ったあのコンビニだ。那智がいなくなってから私はしばらくあの店にいなかった。思い出してみたらなかったから。でも実際、便利に使える店をずっと避けて生活するのは続かない。結局私は諦めてまた店を利用するようになっていった。どうせどこにいても何をしても、那智が私の頭から離れることなどないのだ。一時も。

ぼんやりとおにぎりを一口ずつ口の中へ放り込む行為を繰り返していた私は、見ることもなくテレビの画面を眺めていた。ちょうど正午前のニュースをやっているところだった。私以外の職員は外の暖かい空気の中を泳ぐように出かけていた。

薄暗いオフィスは閑散としていて、でもそれも私には関知を要しないことだった。

「秋田県の 町で、小学校の校舎の補修工事中に足場が崩れ、作業に当たっていた数名が落下、二人が意識不明の重体、一人が腰の骨などを折る重傷……」とアナウンサーが言ったか言わないかで映し出された画面。

「狩野谷 那智」

瞬間、手が止まる。眼の前に唐突に差し出された愛おしい名前の文字に全てが止まる。無意識にもう一度確かめようとする。

と、その瞬間、もうその画面ではない。それはこちらの都合などもともと無視しているの、手のひらを滑り落ちる砂よりも容赦なく私の手から遠くへ過ぎ去ってゆく。私は一人その場に残される。時間が止まったまま。思考も止まったまま。あの日。那智がいなくなつたあの日のように。

と同時に私はほかの番組でそのニュースがやっていないカリモンでチャンネルを探す。何度も何度も同じボタンを押し、くるくると画面が切り替わるのを息もしないで見つめる。外では正午を知らせるチャイムが聞こえる。

私は同僚が戻ってくるのを待って、「すぐに実家に帰る事情ができた」と言って早退した。そしてそのままネットカフェに行き、ニュースを丹念に調べた。テレビで見た報道はすぐに見つかり、那智の名前も確かにあった。秋田、建築工事、狩野谷……。同姓同名なんてありえない。私は事故のあった工事現場の住所を小学校から調べ、メモにとり、続いてその住所から地図を確認し、そこへ行くまでの交通手段を調べた。何度も何度もメモにとり、必要なものは印刷して、画面と照らし合わせ確認した。那智は重体で意識不明だと書いてあった。運ばれた病院はわからなかったが、工事現場の小学校から近い病院がいくつかあったのでその一覧も印刷した。

そこまでできると私はそのパソコンで退職届を作った。その足で会社へ戻り退職届を出した。上司はびっくりして礼儀として事情を訊きたがったが、職場でいつもどちらかといえば暗い顔していた、いてもいなくても大して支障のない女性職員が一人いなくなるのを、止める必要もなかったようだ。退職届は受理され、色々手続きが必要な書類はあとで自宅へ郵送してもらうことになった。訝しい顔いぶかをしている同僚に「お世話になりました」と頭を下げ、自分の私物だけを紙袋に詰め、私はどんと職場を後にした。

時計を見ると夕方5時前だった。空はうつすらと紅くなり始めていた。私はそのまま駅に向かい夜行列車の時間を調べた。自宅へ戻り、小さなポストンバッグを取り出し荷物を詰め始める。冷蔵庫の中を見てすぐに腐りそうなものを新聞にまとめてビニール袋に入れ、隣の部屋に暮らす新婚夫婦の所へ行き、小さな封筒（中にはさやかながらお礼が入っている）を差出し燃えるゴミの日に出して

もらつようつにお願いする。そして私は駅に向かう。途中の銀行で預金通帳を確認し、当面困らないだけの現金を下ろす。すでに茜色の空は蒼暗くなり小さく星の光が見える。

## 第14章・悶える鳥その2

夜行の長距離列車は閑散としていた。さっきまでいたホームはごった返しの人だったのに。誰もこんな時間に電車で遠くへ行くことは思わないのだろう。私だって最初は新幹線を考えたのだ。でも地図で調べた時にその町がかなりの僻地へきちに感じたので、なるべくそこに近い駅を目的地にしようと思った。それに新幹線で向かったところで、仮にうまく病院までたどり着いたところで、今夜いきなり面会することはできないだろう。

普通に考えれば、明日の朝早く出発することだってできた。でももう一刻も一人で待つてるだけの空間にいたくなかった。だけど最短距離で突き進むには私に勇気が足りなかった。那智は私を置いていったのだ。何も語らず。そこには語るべき言葉がなかったのかもしれないし、あつたとしても言い訳という出口のない言葉しかなかったのかもしれない。

正直、那智に会うのが怖い気持ちがあった。那智が私の前から姿を消して3年が過ぎようとしている。24だった私は27になり、28だった那智は今年で31になるはずだ。お互いの知らない空白の3年間で“何もなかった”3年間だとは思えない。那智は一人じゃないかもしれない。でもそれが私にはどうしても想像できなかった。那智が私じゃない誰かということが。私が那智以外の人の隣にいることなど考えられないように。

「ちよつと、あんだ。」

不意に声をかけられ、びくつとする。

「ちよつと。」

それが私に向けられた声かけだと理解するまでに時間がかかる、と同時にそれを否定したい気持ち<sup>が</sup>交差する。

「・・・私ですか？」

「そう、あんだ。」

目の前にいるのは髪をチリチリにした茶髪のお兄さんだった。学生？でも胸ポケットから煙草が見えるから八タチは過ぎているのだろうか。

「な、なんでしよう。」

私の声は震え、“あんだなんか知らない”と言っていた。

「大丈夫か？」

「はい？」

「いや、俺向こう側に座ってるんだけど（といって彼は私から少し離れた対向側の席を指差した）、あんだの顔色が真っ白だからさ。なんか気分悪そうに見えたから。酷い顔してるよ。あ、そういう意味じゃなくて。酔ったんじゃないかと思って。」

「……。」

その言い方に疑う所はなかった。急に、見た目だけで判断した自分の浅はかさを恥じる気分になった。

「あ、大丈夫です。酔ってないです。ありがとうございます。」

「そお？じゃあいいけど……。失礼だけどこまで行くの？」

「……終点まで。」

「じゃあ俺と一緒に。何かあれば言いなよ。酔い止めとか、もってるから。」

そう言うと彼はどんどん自分の座ってた席の方へ戻って言った。そして大きなザックからとても厚いハードカバーの本を取り出し、肘をつきながら読み始めた。おそらくさつきまでそうしていたのだろう。確かにちょうど対角線上に私が見える距離だった。私からも彼がよく見える。

……私は何も見ていないんだな。そう思った。自分の頭にあるものでいっぱいいっぱいになって、周りのことなど何も見えていない。見ようともしていない。視野が狭い。あの若いお兄さんでも周りのことを見ようとして、実際見て、ぼんやりしている私に声をかけてくれたのだ。おそらく私にはそれさえ気づかないだろう。

この3年、ただ茫然と生きていただけだった自分が急に心細くなった。こんなんで、那智に会って大丈夫だろうか。私の那智だった那智じゃないかもしれないのに。窓ガラスに映る私は本当に頼りない顔をしている。どこにいても、何をしていても「これでいいの？本当にこれでいいの？」と、どこまでも自問自答して、答えのないまま彷徨さまよっている小鳥のようだ。

「小鳥遊たかなしって読むんだよね。」

那智といったおでん屋が懐かしい。

小鳥が遊べる状況「鷹たかがない」「たかなし……。今の私はいつそ鷹たかがいたならさらってほしいくらいだった。この孤独から私はいつ解き放たれるのだろうか。」

### 第15章・悶える鳥その3

肌寒くなつて目が覚めた。いつのまにか寝てしまったようだ。窓を見ると一瞬トンネルの中かと思つたが、トンネルを通つた時に聞くゴォツという音がしないのでよく見ると、遠くにポツンポツンと明かりが見えていた。

着の身着のままに来てしまつたが、秋田県はおそらくまだ寒いのかも知れない。春が近い今の時期でも。私は座席の上の荷物の網棚から持つてきたポストンバッグを下ろし、中から念のために持つてきた携帯用のブランケットを出して膝の上にかけた。それから電車に乗る前に買ったおにぎりを食べ始めた。おにぎりは冷えていて、味が多分あるんだろうけど、よくわからなかつた。ペットボトルのお茶もホットを買つたが、温かさを味わうことなく冷めてしまつていた。

ふと、さつき声をかけてくれた男性の方へ眼をやる。彼はコートを頭からかぶつて、身を小さくしていた。そして両足を前の座席に投げ出していた。それを見た瞬間、自分も足が重たくなつてることに気が付いた。考えてみればもう数時間座りっぱなしで足を下ろしたままなのだ。

私はきよろきよろと周りを見渡し、ほとんど人がいないことを確かめてから（わかつていたことだけど）そつと両足を靴から出して、前の座席に足を乗せた。足を乗せた分、膝の裏あたりがちよつと冷える感じもしたが、冬用のスラックスだったのと、わずかだが足元から暖房もでているのが幸いしてそんなにしんどくはなかつた。

おにぎりを食べながらも私はまたあの方の方へ眼をやる。なにげなく、でも無遠慮な目で。特別な理由はない、ほかに視線が向く先がないからだ。それに……。私が職場や、生活で関わる（たとえばコンビニの店員とか）人以外の男性と口を聞くのなんて、那智が

いなくなつてからはなかつたのではないか？私自身、今それに気が付いた。しかも話かけられるなんてことは皆無だ。自分はなんて閉鎖的な人生を送っているのだろう。那智がいなくなつてからの自分は、那智と知り合う前の自分よりもさらに増して無気力になつてしまつてゐる。“ひっそり”という言葉があまりにピッタリしてしまふ。ほとんど寄りつかないからわからないけど、あの男好きの母親よりも私の方が刺激も素っ気もない日々を暮らしているに違いない。おかげでお金だけは貯まつたからこうして急なことにも身動きが取れたけど、でも私は別にその為に“ひっそり”暮らし、“こっそり”お金を貯めてたわけじゃないのだ。

私はそこから自分のことを考えると本当に滅入つてしまひそうなので考えることをやめた。一度考え始めたことを頭から放り出すのは実はとても難しいことらしいが、私はそれに慣れてゐる。慣れたのだ・・・もつと正確に言うとなれるようにするしかなかったことの延長線で、結果的に慣れてしまった、というのが一番しっくりくる。

那智がいなくなり、しばらくはそれを受け入れることができずにもがいて苦しい日々を送つていたが（文字通り涙も枯れ果てたし、どうしてこんなことになつたのかを必死に考えるだけ考えた。答えなどないのに。）、それはやがて私に諦める術を取り上げ、ただ孤独という暗闇に放り出すことで落ち着いた。思考を止めることで、私はその孤独という果実を食べ続けることができたのだ・・・。

目を閉じて、見知らぬ町の駅のホームに立つ自分を想像する。この列車を降りた後はどういけばいいのかわからない。事故のあった小学校はわかつてゐるが、肝心の那智のいる病院はわからない。警察に行くことは避けたかつた。警察は私にとっては正義の味方でも悪い人を捕まえる機関でもなくて、誰か国家権力に逆らう奴がいなければ見張り、逆らおうとする奴がいれば脅して縮こませようとする番犬の機関にしか思えないからだ。何故だかとにかく昔から警察

というのが大嫌いだった。

とりあえず小学校へ行ってみるしかないだろう。それが図書館があれば地元の新聞が見られるかもしれない。

## 第16章・悶える鳥その4

寝ようと思っても、よくよく考えてみればこんなふうには夜行列車などに乗ったこと自体初めてだった。いや、私はここ数年30分以上電車で揺られることもない。うとうと、はできても、寝るまでは難しいようだった。

どうせゆっくり寝ても寝なくても大きい差が出ることはないのだ。多分、ない。那智は・・・私が訪ねていくことを喜んでくれるだろうか。それとも迷惑なのだろうか。そもそも無事なのだろうか。意識不明の重体、とテレビのニュースは言っていた。「意識不明の重体」って、どれくらいの状態のことなんだろう？

でもその一方で、私は那智が死んでしまっていることは全く考えなかった。考えられないのではなく、考えの候補にならなかった。そんな前提はなかった。普通なら、たいがいの人が最悪の状況を想定するだろうしそれに基づいて行動するだろうけど、その時の私は全くそれは無関心だった。那智は生きている。それは当たり前、という言葉が不似合いなほど当然のことだった。自然だった。だから私はただ身体の状態だけを気にしていた。そして私が姿を現すことでの彼の反応を。もし、明らかに迷惑そうな顔をされたら・・・私は他人のふりをすればいいのだろうか。それが私に可能だろうか？

私は目を閉じながらそのことについてちよつと想像してみた。ベッドに横たわる那智のそばにいる自分を。そばに立ち「那智」と声をかける自分を。でもなんだか現実味がなかった。そうしているうちに線路の揺れがだんだん自分の身体感覚と交差していくのがわかった。交差は少しずつ小さくなってやがて曖昧にひとつとなり、その波が私を眠りという泥の中へいざなっていた。

その眠りから唐突に眼がさめる。窓を見ると夜の暗闇を一気に抜けたような陽がさしていた。ところどころにある雪にその光が反射してキラキラ光っている。

「あんた、起きた？」

座席の上から急に声が降ってきたのでドキツとした。見ると（見なくてもわかったのだが）あの彼だった。

「あ、はい。」

「大丈夫か？女の人に一晚中夜行列車はしんどいだよ。」

「だ、大丈夫です。」

「そうか？じゃあよかった。以前、乗ったはいいがずっと吐き続けている子がいてな、それ以来女の子がこの列車に乗ってるのを見ると気になっちゃうんだ。」

「・・・それなら女性が見えない車両に乗ればいいのに。」

「なるべく女性のいない車両に乗るようにしてるんだけどね。」

「・・・！この人、ひとが思ったことが読めるのか？」

「私は大丈夫です。」

私がそう言うと彼はそれ以上は何も言わなかった。そして

「隣の車両に洗面所があるよ。」と言って自分の荷物のある座席の方へ歩いていった。

悪い人には見えないけど変な人だなあ、と思いながら私は自分の荷物を下ろし、ボストンバッグから洗面用具とタオルを出した。ちらつとあの彼の方を見ると、彼も荷物を降ろしてなにやらやっていった。

洗面所で顔を洗い、蒼白い自分の頬を眺める。こんな表情かおをしているのも、他人だって気にするはずだわ、と思った。おそらくまだ自分の年齢は世間一般的には若い方なんだろうけど、今の自分の顔を見てると疲れが出てしまっていてなんだか老けているような感じに見える。それでもちよっと手入れをし薄化粧を直したら、さつきよりはまともな自分の顔に戻った。私はあんまり化粧をする方

じゃないが化粧そのものは好きだ。気が引き締まる。

自分のいた車両へ戻り、また彼の方へ眼を向けると、彼はまたハードカバーの本を読んでいた。が、ふと顔を上げ、私と眼が合うと「よっ」という感じで手をあげた。びっくりしたが、私も会釈を返して座席に座った。変な人。

時刻表を見るとあと1時間くらいで終点に着くのがわかった。私はぼんやりとまた外を眺めた。

「あんだ。」

「はい？」

あんだ、と呼ばれるだけで自分のことだとわかるのがつらい。でもこの車両にはたった二人しかいない。声の距離から、彼が自分のいる座席から私に声をかけているのだと思った。

「バナナ食うか？」

「バナナ？」

私が返事したかしないかで、もう彼はバナナを持ってこっちへと歩いてきた。

「はいよ。」

と、私の方へ投げる。あわてて受け取った。

「ナイスキャッチ。」

ニッコリ笑ってまた自分の座席に戻る。私の手にはバナナが1本。

「あ、ありがとうございます。」

多分相手の返事はどうでもよくて、とにかくバナナをあげたかったんだな、心配してくれてるんだな、と私は解釈した。見るとそのバナナには198円の値札が貼られていた。私は小さく吹きだした。と同時に彼の「あっ！」という叫びが聞こえた。

「俺、値札ついてるバナナあんだに渡しちゃった？」

なんだ、そんなことまで気にしてるんだこの人、そう思ったら今度はしっかりと吹き出して笑ってしまった。

くすくすと笑っている私を見て、その彼も笑った。誰かと一緒に笑

うなんて、なんて久しぶりのことだろう。

## 第17章・悶える鳥その5―名無しの男の邂逅―

ただ気になった、としか言えない。

その女がこの夜行列車のホームに立っているのを見た時に嫌な感じがした。自分の中での古傷が疼きだしたのを俺ははつきりと感じた。

年は25くらいだろうか。いや、もつと若いんじゃないか。もしかしたら20そこそこかもしれない。見た眼だけでは判断つかない。

夜行列車の始発のホーム。そもそもそこに若い女がいるだけでも目立つ。しかもどうやら一人のようだ。自慢じゃないが俺の方は旅慣れている。というか、旅を日常とできないかと本気で思っている。くらの男だ。旅の為に働き、金がたまればそのまま何処かへ出る。国内も国外も行く。行く先は決まっていることもあるが決まらずにとりあえず出てしまうこともある。若い頃は国外ばかり眼が行って“地の歩き方”を片手に外国ばかりに行っただけど、ここ2〜3年は国内ばかりだ。だからというわけじゃないし自慢するつもりもないけれど、俺はいつの間にか眼にした旅行者がだいたい何の目的でどこへいくのか、旅行に慣れているのか慣れてないのかなどの見分けがつくようになっていた。たとえばサラリーマンの出張ならたいがいスーツ・ネクタイ。まあこれは普通の人なら分かると思うけど、女の人はどちらかというと仕事関係で出かけるよりは個人的な旅行の方が圧倒的に多い。荷物の数も男のそれと比べて多い。しかも大きいバッグひとつというのが少なく、だいたい2〜3個。その大きさを何泊くらいなのかは推定できるし、バッグはだいたい新しい。来ている服装も「今日おろしたてです。」と一目でわかるような服だ。俺が思うに女性は同じ人（特に友人同士で独身なら）と旅行にいう場合、たいがいバッグを買いかえるようだ。俺は何度もホ

「ムやら旅先で」「この日の為に新しいバッグ買ったの。うちにあつたんだけどね。」「洋服も奮発しちゃった。だって旅行だしー。」「あたしもー。」という会話を耳にした。最初はそれを聞きたびに不思議でしようがなかった。どうして滅多に使わない(だろう)ものを、ないならともかくあるのに買うのだろう?と。洋服はともかくとしても。でも聞き慣れると疑問は納得になった。女は、たいがいの世の中の女はそういうもんなんだ、そういう結論で納得した。納得した所で俺の人生とは何の関係もない。

だが俺の個人的観察はどうでもいい。不自然なのは今そこにいる女だ。恰好を見ても旅行慣れしている感じじゃない。今の時期の秋田に行くには軽装だし、申し訳ないが洒落っ気にも気を使っていない。荷物を入れてるバッグも適当だ。大きくもない。あの中に厚手のコートが入っているとは思えない。どう見ても、何かを思いついて思いついたままにフラッと家を出てきました、という感じ。その感覚は俺にも多少理解できるが、少なくとも彼女は乗りたくて夜行列車に乗りに来た、という感じじゃない。ぼんやりと遠くを見つめるような(少なくとも俺にはそう見えた)眼は視線定まらずに思える。顔色も悪い。とにかく、どこをとつてもどこからどこまでみても、不安定であてにならなかった。綱渡りしているとまでは言わないが、平行棒を片足で立っているような・・・そんな危うさがあった。

俺はその日半年ぶりに故郷、秋田へ帰るところだった。帰ると言うよりは一旦戻ると言う方が正しい。まだ旅の途中だった。静岡の小さな漁村の小さな宿にしばらく留まっていた俺の所へ、今日義理の姉から電話があった。兄が仕事に事故にあつたと。小学校の補修工事中に足場が崩れ、兄は落ちたらしい。どれくらいの高さから落ちたのかわからないが、どうやら重傷のようだ。電話の向こうで義姉は混乱していた。俺はまず命に別条がないのかどうかを訊いた。

どうやらそれは大丈夫なようだと言姉は答えた。俺は「それだけわかればいい。とにかく一度帰る。今すぐに宿を出る。」と言って電話を切った。宿のすぐ近くを東名高速が走っていたので宿代を払って高速バスに乗った。東京からも高速バスに乗ろうかと思っただが、今の時期はまだウインタースポーツをやる為の車がけっこういるし、バスに長時間揺られるより電車の方が好きだった。俺は義姉に電話し、再度急ぐ必要があるのか確かめた。義姉はさっきよりずっと落ち着いていた。

「さっきはごめんなさい。」と彼女は言った。

その「ごめんなさい」に色んな意味が含まれていることを俺はわかっていた。

「急がなくていいなら夜行列車に乗って帰ろうと思うんだ。着くのが明朝だけだ。」

俺がそう言つと義姉は「それでかまわない。」と言った。そして電話を切った。

それから俺は駅の地下にある食料品売り場で適当に食べ物を買った（基本的に俺は初めての場所じゃなければ駅弁は買わない）、この列車に乗るべくそのホームに立った。その女を眼にするまでは俺はほかのことを考えていた。考えても仕方ない過去のことを。でもその女を見て、そのなりが普通に見えないと思っただけからはその女を注意深く見ることにした。古傷が疼きだすのと同時に。2度とあんな思いはしたくない。

## 第18章・悶える鳥その6（前書き）

「花を摘むひと」をお読みくださったすべてののかたへ。

こんにちは、樹歩です。いつも私のつたない小説をお読みくださり、本当にありがとうございます。思うように掲載ができなくて申し訳ありません。今回、私の諸事情の為書く時間がとれず、やや短めではありますが、第18章として更新させていただくことにしました。これからも頑張って書き続けたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

H22・6・9 樹歩

## 第18章・悶える鳥その6

終着駅が近づくと車内にアナウンスが流れた。私は時計を見る。

朝6時。やれやれ、この時間じゃどこにも動けない。それに思ったよりも寒い。列車の窓ガラスから冷気が入ってくるのがじんじんと伝わってくる。思えば、こんな寒い地域に来るのは生まれて初めてのことだ。

考えても仕方ない。もうここまで来てしまったのだ。那智に逢いたい。その一心だけで来たのだ。それを思うとほんのわずかだけ私の胸に温かい灯りがともる。この3年間私は本当に独りぼっちだった。文字どおり孤独だった。失われたものの大きさを理解できないほどの空虚がそこにあった。正直那智に逢うのが怖い気持ちもある。まず、私が那智に逢いに行くことで那智に迷惑をかけることになるのではないか。何か事情があるからこそ那智は黙って私の前から姿を消したのだ。私に言えない話。私が知ると都合の悪い話。でも私たちは3年も一緒にいたのだ。同棲こそしていなかったが限りなくそれに近い暮らしとつながりがあった。確かにあったのだ、まぼろしとか、夢とか、そういう曖昧なものじゃなくてそれは現実に私と那智の人生にあった事実のことなのだ。例え那智が一方的にそれを放棄したとしても、私にはせめてその理由を知る権利があるはずだ。どんなにつらい理由でも。納得できないことでも。

私は柵から荷物を下ろし、行方のないため息をついて、また座席に腰を下ろした。

那智。私の大事な那智。私のすべてだった、今でも私のすべてと言っている人。ねえ那智。私はあの夜から誰にも抱かれていない。私の身体にはあなたの指以外触れられることはない。あなたを私の人生の一部にできるなんて思いあがった気持ちはなかった(と思う)けど、心だけは繋がっていると思うていたのに。那智。どうして私

はこんな思いで見知らぬ土地にあなたを追いかけなくてはならないの？本当にこれでいいの？本当に私はあなたに逢いに行ってもいいの？

私の思いが窓ガラスを吐息とともに曇らせる。泣きたい気分になる。それを遮るように列車が駅の構内に入った。田舎町の小さな駅。向こうには海があるのだろうか、ぼんやりと水辺に霧もやのかかった景色が見える。

「あなた。」

背後からの声にびくつとする。相手が誰だかわかっていても急に声をかけられるのはやぶさかでないとは言えない。

「は、はい？」

「これからどこ行くんだ？」

どうしてそんなこと訊くのだろうか？「あの、友人に会いに……。」

「この町に？」私はうなずく。

「こんなに早く？」私は首を振る。バナナをくれたその人はちよつと呆気にとられた、要を得ないといった顔をしている。

「こんなに早く着くと思わなかったんで、ちよつと駅で時間つぶして、それから会いに行きます。」

でも彼は実際は私の返事を待つ間もなく一枚の紙切れを手に渡した。見るとそこには名前と携帯の電話番号が記してあった。

「これ……。」

「俺の。」

「？」

何が何やらわからず、腑に落ちない顔をしている私に彼は言った。

「あなたにはあなたの事情があるんだろう。楽しい旅ならいいんだが、昨日からのあなたを見てると悪いがそうは思えない。何か困ったら俺でよければ言ってくればいい。」

「……。」

「俺にとっては故郷だ。選べるならほかの所が良かったが。」

そう言うと彼は荷物を持って列車を降りていった。私も荷物を持つ

てあとに続いていったが、もう彼はホームの階段の上の方へ行っていて、私が上がった時にはすでに見えなくなっていた。

## 第19章・悶える鳥その7

終着駅に降りたのは私を含めて多分数人だったと思う。

改札を出ると小さな待合室があった。誰もいない。私は一人、そこにあつたベンチに腰をかけた。大きな石油ストーブが設置してあるが火はついていない。切符を客から（私からも）受け取った若い駅員が改札から戻ってきて、ベンチに座ってる客（私）がいるのに気づいてびつくりした顔をした。そして

「お客さん、誰か待つてますか？ストーブをつけましょうか？」と声をかけてくれた。私は一瞬「大丈夫です。」と言う所だったけど、思い直して素直に言った。「スミマセン、お願いします。」

ストーブの小窓から奥に炎が揺れていた。それを眺めていると何となく誰かに髪を撫でてもらっているような安心感が広がった。出口までちよつとだけ距離があつたのでそんなに寒くはないが冷えているのは間違いない。外を見ようとすると窓ガラスが結露している。ここだけが暖かい。

私が改札を出た時にも既にあの彼はいなかった。きっと誰かが迎えに来ていて急いで階段を駆け上がり、改札を抜けていったのではないか。そんな気がした。どうして私にあんなメモをくれたのだろう。私は他人から見てもそんなに怪しい女に見えるのだろうか？

そうかもしれない。実際、今こうして那智のいる街にきたのにその実感もないし、那智に逢える期待よりも本当に那智に逢っているのかどうかという不安の方が大きい。もし逢つて、私という存在が彼にとつてただ迷惑なだけだったらどうしよう。那智に、昔の恋人かれに浴びせられたような視線を向けられたら。そんな目にあうくらいだったらこのまま引き返して思い出の中で暮らした方がいい……。那智を想える気持ちだけが私にとって自由だ。それだけは失いたく

ない。このまま那智に逢えないまま一生過ごすことになっても、那智に私自身を否定されるくらいなら、那智の心を知らないままに日々を消費していく方がいい。

ふと列車の時刻表に眼が行く。午前の列車にはまだ2時間ある。それも在来線で、私が乗ってきた列車が引き返すのは今日の夕方だった。夕方出発して明日の朝終着駅に着く。都会の駅に。

私の脳裏について昨夜いた都会のホームの光景が浮かんだ。何も考えずに列車に乗ったことを。いや、昨日の今頃、私は自分のうちでまだ布団に包まれていた。もうすぐ朝が来ることを遠い記憶で予感しつつ、浅い眠りに漂っていたと思う。

このまま、引き返してしまおうか。

そこへさつきストープをつけてくれた若い駅員が近寄ってきた。

「寒いでしょう。よかつたらコーヒーいかがですか？」

そう言ってくれた手にはすでに湯気の上がつたコーヒーを持っていた。

「・・・ありがとうございます。」

手を伸ばし、マグカップを受け取る。おそらくここの職員のものだろう、ふちに茶渋の跡がぼんやりついている。あたたかい。ゆつくりと口に運び、一口すする。途端に熱い液体が口いっぱいに広がり、喉を通り胃に入ってゆくまでわかる。駅員が私の隣に腰掛けた。この時間は何もすることがないのかもしれない。次にこの駅に列車が来るまで1時間近くある。それによく見ると彼は私が思うほど若くないようだった。私より上かもしれない。

「おいしい。」

「よかった。一人で飲むのは淋しいですから。」彼はちゃんと自分の分もコーヒーを持っていた。

ヒトリデノムノハサビシイデスカラ。

「こちらへは観光ですか？・・・観光できるようなところじゃないですが。」

「・・・いえ。」

私の返事の仕方が素っ気なく聞こえたのだろう、彼はあわてて「ああすみません、立ち入ったことを伺いましたか。」と謝った。

「いえ、違うんです。・・・人を訪ねてきたんですが・・・このまま帰ろうかと。」

「・・・。」

彼は返事に戸惑ったようだった。それはそうだ。私は何を言い出すのだろう。バカ正直に。こんなことを全く関係のない人に言った所でどうしようもないのに。

「何か事情があるのでしょね。」

彼は静かにそう言ってそのまま無言になり、ストーブの火を見つめていた。やがて小さい声で言った。

「でも夜行に乗ってまで来たのでしょうか。私なら会います。」

ヤコウニノツテマデキタノデシヨウ。

そうだ。何も考えずに仕事を辞めて夜行に飛び乗ってまで那智に逢いに来たのだ。このまま元の生活には戻れない。今さら、昨日には戻れないのだ。

「あの、最近この辺の小学校で事故があったと思うんですけど。」

## 第20章・悶える鳥その8

私の手には小さなメモが握られていた。あの若く見えて、でも私より落ち着いて見えた駅員の彼からもらったメモ。そこには那智が事故にあった小学校の住所が書かれていた。

「事故にあった方のお身内なのですか？」と、最初彼は訊いた。私はそれには答えようがなかったので、苦笑いを浮かべた。もし口にするなら「どうでしょう？」と言う言葉の表情<sup>かお</sup>で。それを見た彼は、つい先ほど交わした私とのやり取りを思い起こしたのだろう、メモを書きながら静かに言った。

「・・・大怪我をしたとは聞いてますが、命に別条のある方はないようです。」

そしてそのメモを眺めては握りしめ私はひたすら歩き、その視界に小学校らしき建物を確かめた所だった。春の気配を散りばめている田舎の道。学生の姿がほとんど見られないのは春休みの為だろう。それでも数少なくすれ違う人がいた。その多くは駅に向かっているようだった。今から出勤なのだ。昨日の朝の私のように。

24時間なんてあっという間な気がしていたけれど、本当は思ったよりもずつと長い時間なのかもしれない。

小学校の門は開いていた。校舎に入つてゆく人影も見えた。校舎には足場が組まれていたが、そこには誰もいなかった。工事作業は中断されているようだ。人影が見えた方へ歩いていくと職員用玄関があった。中へ入つて行こうとする。とそこに作業着を着た中年男性（用務員だと思われる。手には花壇に水を蒔く為？のじょうろを持っていた。）がいて、私と眼が合うと「あんた誰？」という顔をした。

私は挨拶もそこそこに簡単に事情を話した。自分は怪しいものじゃない、ここの小学校で校舎の補修工事中に事故にあった人の友人で、安否を知りたいのでこの病院に運ばれたのか教えてもらえないうらるか・・・と。一言一言を丁寧にかつ簡潔に、しかし懇願の気持ちを込めて私は伝えた。

「・・・俺はあんたを怪しい女だと思わないけれど、俺はただの用務員だから、一応校長先生とかに訊いてみるよ。」  
そう言うと彼はそこで待ってて、というしぐさをして校内の廊下を歩いていった。

懐かしい。小学校なんて建築物は多分自分が行ったところと縁が切れてからは行くことがない。なんというか、こう・・・、小学校の匂いがする。絵の具やら、泥んこやら、雑巾やら、笑い声やら、怒鳴り声、拍手、窓、中庭、太陽の光・・・そういう匂い。一瞬ノスタルジックに浸る。

しばらくするとさっきの用務員とスーツ姿（まさに紳士的な）の男性が姿を見せた。

「えーっと、お宅さんかな？事故のことを訊きたいとか。」

私の知っている「小学校の校長先生」は年をとって少しく太っているはずだったが（実際自分の通った小学校の校長先生がはたしてそうだったか？すっかり忘れた）、目の前の彼はすっきりとスマートで、長身でもちろんハンサムという部類の男性だった。そのせいで私はしばしポカンとしてしまった。

「いえ、あの、事故のことではなくて、」

「違うよ、この人は事故で病院に行った人に会いに来たんだよ。病院を知りたいんだってさ。」

用務員が横から口を出してくれた。

「うーん。こういうことって勝手に教えていいのかわからないんだよ。ほら、今は個人情報の問題とかあるし。」

「お願いします。川崎からきたんです。どうしても無事を知りたく

て。」

「無事つて、そんなのはじかに連絡取ればわかることでしょう。命に別条がある人はいないんだし。」

イノチニベツジヨウガアルヒトハイナイ。

「・・・お願いします。絶対に迷惑かけるようなことしませんから。」

「うーん・・・、そう言われてもなあ。」

紳士的な校長先生は見ためとは反して、案外言うことは年寄りくさかった。

「いいじゃんか、先生。俺が教えたことにすれば。」

「え？」

「またもや用務員が横から口を入れた。」

「あんたが？」

「一応今日は先生が登校してたから知らせたけど、誰もいない日にこの人が来たならどのみち俺にしか会わなかったんだから。」

「そりゃそうだけど。」

「先生は警察やらなんやらから色々約束させられてるんだろうけど、俺は何もないし。」

「あ、あ、お願いします。」私はここぞとばかりに頭を下げた。

「うーん・・・」校長先生はちらっとこちらを見て、いかにも迷っているそぶりを見せたが、

「じゃあ俺はいなかったということだ。」そう言ってくれた。

「ありがとうございます。」

「そもそもでかい病院なんか一軒しかないよ。あんたもこんな回りくどいことしなかったって、タクシーに乗って訊けば分かったかもしれない。駅からきたんだろ？」

「・・・なるほど。そうだったかも。でもあの駅員はそんなこと教えてくれなかった。いや、人のせいにしてはいけない。」

「病院名を教えるよりも連れて行ってやるよ。」

彼はそう言い、私を促して歩き出した。校長先生の姿はすでにない。

私は彼の後ろをついていき、やがて小さな軽自動車に乗った。

## 第21章・悶える鳥その9

軽自動車は私が出てく歩いてきた道を半分くらい戻って、それから全く知らない方向（そもそも私はこの辺りのどこも知らないのだが）へ曲がって行った。

「いいところですね。」

と、言おうかどうか迷った。狭い自動車に二人きりで、それもたつた今知り合つたばかりの人とで。親切にしてもらっているくせにおこがましいとは分かっているが、それでもこういう場は何となく居心地が悪いものだ。何か、取りとめのない話をして、この何とも言えない重たい空気を和ませるのは無理でもごまかしたい・・・私はそう思った。その為の無難な一言を考えていて、それが

「いいところですね。」だった。

でもその一言が出てこない。なんだかとても嘘くさくて。本心ではないようで。場をごまかす為の無難な一言のようで。結局私はなにも声を出さずにいた。ため息もつかないようにしていた。重たい空気でこのままでは窒息するんじゃないかと思ひ始めた頃、

「あれだよ。」

と用務員の彼が言った。菜の花が一面に咲いている向こうに白い建物が見えた。その病院と思われる建物はさつき行った小学校とほとんど同じ形だった。

「あの、ここでいいです。」

「いいよ、すぐ前まで行ってやるよ。」

彼の返事に反射的に私は言った。

「いえ、本当にここで。止めてください。」

彼は不審そうな顔をしたが左の路肩に車を寄せて止めてくれた。

「・・・すみません。色々助けてもらって。」

「……。」

「歩いていきたいんです。」

「……あなたの好きにすればいい。」

私は深く頭を下げて一礼すると静かに車のドアを開けた。

車を降りると、駅を出た頃よりもやや温度が上がってきているのが分かった。寒さ、というより冷気が薄くなっている。冷たさの中にもほんのりと暖かいぬくもりを感じることができる。そして目の前の菜の花。

「ここだけ春のようでしょう。」

助手席の窓から用務員の彼の声が聞こえた。

「はい。キレイですね。」

私は一面の黄色い風景から目を離せずに答えた。

「……誰が気がかりでここまで来た？」

「え？」

思いもかけない問いかけに車へ視線を移す。助手席の向こうに中途半端にこちらを見上げる顔がのぞく。

「あなた、誰に会いに来たんだ？」

その声はさつきまでの用務員だった彼の声ではなかった。個人の、全く見知らぬ他人の男の声だった。その、まるで暗黒の底から伸びる手のような声には私は動けなくなった。視線を彼の半分だけ見える顔に注いだままその場に立ちすくんだ。

「……。」

つい数秒のお互いの視線の交差が、数分とも数時間とも思った。

「……。」

私とその問いに返事をしないとわかったかのように、彼はそのまま車を発進させた。両手に咲き誇る菜の花のあいだの一本道、向こうに白い建物が見えるその道を、同じく白い軽自動車がつすすぐにすすんでゆく。その光景は一枚の絵のようでもあり、写真のようだった。でもその車は絵にも写真にもならないと決めているかのように

乱暴にUターンしたかと思うと、もうそこに私がいることをなかつたことにして行つてしまつた。

私は気を取り直し歩き始めた。あの人は何を言いたかつたのだらう？ただの小学校の用務員だと思つていたが違ふのだらうか？事故に関わつた人なのだらうか？・・・那智の知り合いなのだらうか？・・・。

歩いてゆくとだんだんその白い建物が、最初見た時よりも実は大きく（大きいといつても都会からしたら小さい方だと思つ）もつと白いのだと気づいた。病院のすぐ目の前まであると思つていた菜の花畑が途絶えた先には、小さな緑の絨毯がつかの間広がつていた。もう寒さも感じなかつた。あそこに那智がいる。多分。きつと。

入口が見えると私は立ち止り、上を見上げた。4階建ての建物。その向こうに春先の匂いの空があつた。・・・深呼吸。深呼吸。

「お姉さん。」

「お姉さん、大丈夫？息、苦しいの？」

どうやら呼ばれているのが自分だと思ひそちらをみると小さな女の子がいた。私を見て不思議そうな顔をしている。5歳くらいだろうか。大きな瞳<sup>め</sup>。傾げた首。

「ううん、何でもないの。ありがとう。」

私がそう言つと、彼女はにっこり笑つた。それから目の前の花壇を指差し、

「もうすぐここにきれいなお花が咲くんだった。」と言つた。

「そう。」

「それからあそこはれんげがいっぱい咲くんだよ。」今度は向こうの緑の絨毯を指差した。

「きつときれいだらうね。」

彼女がそう言つてほほ笑んだので私も弱弱しくだつたがほほ笑んだ。どうしてだらう、弱弱しくしか笑顔ができなかつた。



## 第22章・悶える鳥その10

病院の中に入り、本当はまっすぐ受付に行くべきだとは思っただけど、やっぱり行けなかった。つんと鼻をつく消毒薬の匂い。私は何気なく周囲を見渡して「病棟」と書いてある方へ歩いていった。幸い、病棟へ行くエレベーターと受付は全く正反対の方向だった。

エレベーターの前に案内板があり、1階2階は診察室や検査室、病棟は3階と4階だとわかった。そして面会時間も書いてあった。当然のことながら午前中の今は面会時間外だった。エレベーターの方へ向かい、ふとそこに階段があることに気づく。一瞬立ち止まり、やはり階段で行くことにする。

一つ一つ、足を踏みしめて階段を上がってゆく。私は思っていた。ここ数年、ずっと私を支えていたものを。それは逢う、逢った、という物理的な事実ではなくて、逢いたい、ただ逢いたいと、思い続けることが本当に愛する意味のあることだということ。この先逢えなくても、ずっと逢えなくても、永遠に逢うことなく人生を終えることを約束されたとしても、逢いたいと願い続けること。その気持ちだけが私のものだった。那智を焦がれる時の私だった。

ゆっくりと3階に上り、私は息を大きく吸う。深呼吸。一步、階段から廊下に出る。病院関係者に呼びとめられたらどうしよう。いや、そもそも本当はちゃんと訊けばいいのだ。「狩野谷那智の部屋を教えてほしい」と。でもそれはとても躊躇われた。今は午前中で面会時間じゃないし、那智との関わりを訊かれるのも面倒だった。ほんとう 真実のことは言わない方がいい。きつと。

私は目についた部屋から名前を確認していった。さりげなく、さりげなく。途中何度か看護師とすれ違ったが、彼女たちはとても忙しそうで、ちらっとこちらの方を見ても特別声をかけられることは

なかった。多分そのちらつとの視線で、こちらが本当に怪しく危険な部類の人間なのか、放っておいても害の無い人間なのかを見定めているのだろう。自信たっぷり。でもそれがどれだけ当てにならないことなのか、おそらく何か出来事が起きなければ彼女たちは気がつかない。

そしてとうとうその愛しい名前の書かれたネームプレートのある個室を見つけた。

「狩野谷 那智 様」

その瞬間足が止まる。この向こう、扉一枚隔てただけの向こうにある愛しい人がいる。あんなに恋い焦がれた人がいる。

深呼吸。そして私はゆっくりと小さくノックをした。コン、コン、コン、と三回。

「はい。」

返事があった。その声はまさしく那智の声だった。私は扉を開けた。

そこには一人の男性がいた。その人はじっと私を見つめ、次の言葉を待っていた。私とその人の眼と眼は、しっかりとお互いを交差していた。逸らさず、まっすぐ。

遠いあの日。アパートの小さな一室でいつまでも私の髪を撫でて抱きしめていてくれた人。ときどき私の首の匂いをかき、小さく唇をあててくれた人。夕暮れ、知らない街を手をつないで歩いて、絶対に私に車道側を歩かせなかった人。「あたたかいごはんの中にしあわせつてあると思う。」と、炊きたてのご飯を食べるたびに言った人。私が寝がえりを打ったたびに肩を抱き寄せてくれた人。・・・  
那智。

でも私はそこに違和感を覚える。そして急激な胸騒ぎに襲われる。息を止めてしまう。

コノヒトハ ワタシヲ ミテイナイ。いや、私という女を自覚して  
いない。

「・・・那智。」

「・・・はい？」

「・・・那智でしょう？」

私がこの部屋へ入ってこの会話を交わすまでわずか数十秒。でも  
それは億光年の彼方のようだった。

彼は私の眼を、顔を、髪を、首から胸元を、肩から伸びた腕や手を、  
震えている足元を、永遠に底のない湖を見るように見つめた。・・・  
やがて沈黙は私の胸騒ぎを剣つるぎとなつて突き刺す。

### 第23章・悶える鳥その11（前書き）

「花を摘むひと」を読んでくださっている全ての方へ。

いつも目を通してくださりありがとうございます。連載小説としながら更新が滞ってしまいがちで、大変申し訳ありません。必ず完結まで書いていく所存でございますので、どうぞよろしくお願いいたします。 樹歩

### 第23章・悶える鳥その11

「あなたは僕を知ってるんですね。」

その一言の剣はまっすぐに私の胸と耳を撃った。

「アナタハボクヲシッテルンデスネ」・・・私はひとしきりその言葉の木霊を頭の中で繰り返した。

何か言わなければ。何でもいい。何か、次の言葉を。でも私の喉からは一言の声も発せなかった。喉の奥の方がぎゅうっと縮こまっていく感覚が私を支配した。

「あなたは誰ですか？」

那智の声が静かに病室に響く。その瞬間、私は遠い懐かしいあの日々に連れ去られそうになる。

「・・・私・・・私は・・・」

やっと絞り出す私の声が震えていた。

「・・・大丈夫ですか？・・・すみません、てっきり僕のことわかってると思って・・・」

彼の言ってる“僕のこと”は、記憶喪失の意味だった。

「仕事中に高い足場から落ちて頭を打ったようです。怪我自体は時間の問題のようですが、こっち（と言って頭を指差し）は全く見通しが立たないそうです。記憶が戻るのかどうかも。」

「・・・」

私は何も言えずにうなずいた。ぐるぐると何かが私の中でまわっていた。でもその中でもだんだん私は冷静になっていった。そして謝った。

「私こそすみません、怪我をしたとしか知らなかったものですから。」

あの、私は、あなたとちよつとした知り合いなだけなんです。「  
「どんな？」

「いえ、あの、本当にちよつとした知り合いなだけなんです。．．．  
失礼します。」

「ちよつ．．．」

那智が何か言いかけたのも気づかないふりをして、私は一方的に病室をあとにした。何も考えられない混沌の意識のまま、ただ急いで外に出ようと思った。いや、ただ逃げたかった。この場から、この場所から一刻も早く遠くへ行きたかった。

階段の方へ息をするのも忘れて足早に進んでいった時、突然激しい眩暈めまいが起こった。急速に意識が暗闇に堕ちてゆく感触。でも私はどこかで「ここで倒れてはいけない」と必死に言い聞かせる。駄目よ、こんな所で倒れちゃ。ああ気持ちが悪い。なんでこんな時に。ああ那智。せつかくここまで来て私は．．．．．。

「大丈夫ですか？」

誰かが声をかけている。誰に？私に？霧もやのかかった意識が一気に視界を明るくしてゆく。

「あの、看護師さん呼んできましようか？」

どうやら階段を下ろうとしたところで私は半分しゃがみかけていたようだった。

「．．．いえ、大丈夫です、すみません。」

いいながら声の主の方を見ようと顔をあげると

「あ。さっきのお姉さんだ。」もうひとつの声がひびいた。

見ると病院の入口で会った女の子が立っていた。じっと私を見つめている。その瞳が私の中の記憶に言葉にならない何かを訴えている感覚がした。それが何かはまったくわからないけど。

「あ．．．。」

「ココ、知ってるの？」

彼女の隣には母親が立っている。私と自分の娘に交互に視線をまわ

した。

「さつき下の花壇の所で会ったの。ねえ？お姉さん。」

「そうだね。」私はやっとよろけた体勢を整えながら、その時と同じくらいの弱弱しい笑顔をして答えた。

「あの、大丈夫？具合悪そうだけど。」

「はい、大丈夫です。ちょっと眩暈がしただけで。」

「本当？顔色悪いみたいだけど・・・。」

「大丈夫です、もう帰るところですし。」

「どなたかのお見舞い？」

母親かのじよの質問に曖昧な顔でいると

「ココはお父さんの所に行くの。」と少女が口をはさんだ。

「お父さん？」

「うん。ね、お母さん。」

見上げた娘の視線を今度は母親かのじよが曖昧な笑みで受け取る。何か事情があるのだとを感じる。

「ココのお父さん、ココのことわかんないんだって。」

「え？」

急に少女の口から出た言葉に身と心が凍る。冷たいものが背中をつたう。

「・・・主人、怪我をしたんですけど、ちょっと打ちどころが悪くて・・・。」

私の身体のおちこちに小爆発かじよが起こる。

「キオクソウシツっていうんだって。ね、お母さん。」

少女が屈託なくその言葉を放った時、私はかつて那智なちが私との将来あきに何も言えなかった意味を悟った。そして先ほど少女の人を見る瞳に対して湧き起こったものが何なのかを確認した。それは懐かしさだった。

間違いない。この少女は那智の娘こ。そしてこの女性が。

「すみません、変なこと聞かせてしまって。では。」  
母親かのじよがいたたまれないように娘の手を引き私を通り過ぎた。ココと呼ばれた少女は自分の言った言葉が周りをどういう状況にさせるかもちろん理解できてなかった。でも言うてはいけないことを言うてしまったらしい、それは理解できる、という表情を浮かべ、流されるままに母親に手を引かれて歩きだした。

最初はゆっくりと一段一段降りていった階段を、だんだん降りてゆくにしながら足が速くなり、最後には走っていた。気がつく私の頬はボロボロに濡れていた。何が何だかまったくわからなかった。

私的那智。でもあなたは私のあなたではなかった。

## 第24章・悶える鳥その12

自宅に着いたのは夜だった。

病院を飛び出し、たまたま誰かが降りたタクシーにそのまま乗り込み、顔を伏せたまま

「駅へ行ってください」

と言った。運転手は後ろの座席で顔を伏せたまま（正確にはハンカチで顔を覆っていたのだが）、目的地だけ言って黙りこくっている若い女を不審に思ったようだったが、黙って車を発進させた。実際ルームミラーからこちらの様子をうかがっているのが針を刺されているかのようにわかった。でもそんなことはどうでもよかった。どうでもよかった。

駅に着き、電車の少なさに愕然としながらも（私が乗ってきた長距離列車は夜に発車予定で昼間は一本もなかった）、とにかく都会へ向かう電車に乗った。在来線の鈍行で約1時間くらい行くとやや大きな市街に着いた。そこから特急に乗り換え、さらにもう2度乗り換えて、私はやっと自分の馴染みの街に近づいた。

電車を乗り継いでる間、私は何も食わず、水分さえ摂るのを忘れていた。気がつくとは私は朝にあの田舎の駅員からもらったコーヒー以来何も口にしていなかった。身体がとても重くてだるかった。乗り継ぎの途中のプラットホームの自動販売機でミルクティーを買った。取り出し口からその缶の温かみを感じた瞬間、何度も緩んでは乾いた涙腺がまた緩んだ。

文字通りハンカチが乾く間もなかった。とにかく現実を受け入れなくなかった。那智のすべてを受け入れられなかった。記憶喪失？奥さん？子供？何が何だかわからない。わかりたくない。

「アナタハボクヲシッテルンデスカ？」

那智・・・あなたにそんなことを言われるなんて。あなたの中に私の存在が全くなくなる日が来るなんて。今わかった。私は那智がいなくなってから本当に淋しかったけれど、これ以上の孤独なんてないと思っていたけれど、心のどこかで思っていた。私が那智を想うように、那智も私を想ってくれているはずだと。何か事情があつて私の前からいなくなつてしまつたけれど、私のことをきつと想わない筈はないと。そう思うことそのものが私の支えになつてくれていたのだ。あれは本当の孤独ではなかつたのだ・・・。

重い足を引きずるように歩いてようやくアパートの自分の部屋に着いた時、私は放心状態だつた。どこも見ていなかったし、何も聞こえなかつたし、何かを考えると、思うとか、まつたくなかつた。全ての思考回路が止まつていた。私は昨日ここから着ていった服を脱ぐとそのままベッドにもぐりこんだ。眠くなんかない。でもどうすることもできなかつた。ただ身体を丸めたかつた。世界のすべてを遮断して小さくなりたかつた。

気がつくと私は夢の中にいた。夢の中で、私は夢の中にいるんだとはつきり自覚できた。強烈な香りが立ち込めていて、私は身をかがめていた。夢の中で目を覚ました私は「これは夢だ」と思いつつゆっくりと身を起こし自分を取り囲んだ景色を見渡した。そこにはたくさんの、やたら派手に色をつけた花々が咲き乱れて、それは遠く地平線まで続いていて、逆にあまりに現実味のない映像に「夢ではない」と思うくらいだつた。私の頬は、涙がつたつては乾き、またつたつては乾きを繰り返したためガチガチになつたいた。

・・・那智。

あの人の名前を思っただけで泣けてくる。夢の中でまで泣かなければならない。どこにいても、どこまで遠くへ逃げられたとしても、私はあの人から逃げることはできない。那智。私の那智。

「お姉さん、大丈夫？」

急に聞こえた声にびくつとする。あのココと呼ばれた少女が私を見

降ろしている。

「また会ったね。」

「……………」

「お姉さん、あの時お父さんに会いに来たんでしょう？ココのお父さんに。」

これは夢だ。私は夢の中にいる。この花の匂い。自然の花の香りがこんなに強いはずない。色も何となく毒々しい。何かがおかしい。でもこれは夢だからそうなんだろうけど。でもこの子はなんなのだ？何故この子が私の夢にこんなふうに出てくるの？何かがおかしい。夢でもおかしい。

「お姉さん、ココがお姉さんの夢に出てきたからびっくりしてるんでしょ？」

私は何も言えない。何一つ声を発することができない。

「あたしは紅心。お姉さんに会いに来たの。」

## 第25章・悶える鳥その13

「あのね、ココ、知ってたの。お姉さんが今日病院にくること。」「彼女は私の前に立ち、私の顔をじっと見つめた。」

「あのね、変に思わないで。ココ、どこもおかしくない。だけどわかっちゃうの。」「

「・・・何を?」

「色んなこと。色々。わからないこともあるんだけど、時々パツとテレビみたいに出てくるの。色んなこと。」「

それだけ言つと彼女は悔しそうな顔をした。どう言えば自分の言いたいことが伝わるのかが分からなくてもどかしい、とでも言いたい顔。自分のボキャブラリーの少なさを理解しているように見える。絡まった糸を必死でほぐそうとしているようにも見える。」

「今日、お姉さん、本当はもっと病院にいたかったのに帰っちゃったでしょう?」「

「・・・。」

「ココが、お父さんのこと言ったからかなあ、って思つて。」「

「・・・そんなことないよ。」「

「うん・・・でも、あのあと、お父さんの部屋に行ったら、お父さんも変だった。」「

「変?」

「多分、お姉さんのこと考えてたんだと思う。」「

「・・・ココちゃんは人の気持ち分かるの?」

「ううん、わかんない。でもね、お姉さんとお父さんは、なんかね、うーんとね、空気が似てるっていうか・・・。」「

“波長”が合う、ということをお願いしたいのだろうか。雰囲気のことを言ってるのだろうか。

「ただもう一度会いたかったんだ。お姉さんに。だからココお願いしたの。お姉さんに会わせてほしいって。」「

「誰に？」

「誰とかじゃなくて、ただ思ったの。うんと強く。今日ずっと。」  
「念じたということだろうか？念じることで人の夢の中に入るなんてことが可能なのだろうか？」

「……。」

「ねえ、ココの言うこと合ってるよね？お姉さん、お父さんに会いに来たんでしょう？」

「まっすぐな澄んだ瞳。吸い込まれてしまいそうな幼い瞳。……嘘のない、何も知らない瞳。何も知らない瞳。」

「……わ、私は……。」

次の瞬間私は汗をぐっしょりかいて天井を見つめていた。自分が今置かれている状態を理解するまでに一瞬の間があった。

私の部屋。薄暗くて、ごく質素な生活道具しかない閑散とした部屋。さっきの夢はなんだったんだろう。あのココという少女はいったい……。

頭が混乱していた。でも確信があった。ココは私に会いに来たのだ。私と那智が一緒にいる所を見ていなくても、何も知らなくても、あの子はあのわずかな時間で色んなことを察知して、多分それは言葉ではつながらない感情だっただろう、でもあの子なりに確かなものを感じて……。普通では考えられない壁を越えて私に会いに来たのだ。

おそらくもう一度……。私は那智やココに会いに行くことになるのかもしれない。そんな予感に似た気持ちがあった。

## 第26章・悶える鳥その14（前書き）

「花を摘むひと」をお読みくださっている全てのかたがたへ。

更新が遅れて本当にごめんなさい。思うように書くことができない日々が続いています。今回も少しずつ少しずつ書きました。でも大切に書きました。私は書くことをやめません。どうかご容赦いただければ幸いです。ありがとうございます。 樹歩

## 第26章・悶える鳥その14

ココはあれから一度も現れなかった。夢にも、もちろん現実にも私の前に姿を見せることはなかった。

私はしばらくの間、またあの少女が私に会いに来ると思って待っていた。待っていた、という言い方はおかしいかもしれない。もしまた会ったとしても、私は彼女の質問に対する返事も説明さえもできない。何一つ彼女を理解させるものを持ち合わせていない。だから待っていたというよりはびくびくしていた、と言う方が正しいのかもしれない。

毎日ただぼんやりとする時間を流す。食事、洗濯などの最低限の生活らしい行為はするものの、あとは時間という空虚を漂うだけ。頭の中のスクリーンに繰り返すのは那智との蜜月、彼がいなくなつた後の孤独、夜行列車でたどり着いた見知らぬ遠い町・・・そして那智に家族がいるという事実、さらに私を彼自身の中から失くしてしまっているという事実。

「アナタハボクヲシツテイルンデスカ？」

あの時に那智の眼。本当に私をわからなかった。まるで道を尋ねるみたいに。無邪気でありのままに遊んでる迷子の子供のように。どこまでも果てのない瞳で。そこには私とこの部屋で過ごした那智はいなかった。優しく見つめて私の髪を撫でてくれた彼はどこにもいなかった。

行かない方がよかつたのかもしれない。テレビのニュースで彼の名前を見た時、よく考えれば那智が田舎へ帰つたことは一目瞭然だった。私との縁を離れて。そのままにしておいた方がよかつたのかもしれない。けどおそらく私はそうしなかつただろう。できなかつただろう。どうしても自分の眼で確かめなければ。那智の口からその言葉を聞かなければ。

そう思うとなんだか自分が行き場のないかこの鳥のような気持ち

になった。とてもそう感じた。かごの鳥になんかなったことないけど。結局私が行きつく所はあの白い壁で遠い眼をした那智に会うことだったのだ……。どんなにつらいことがそこにあっても。

これから自分がどうしたらいいのかもわからなかった。本当はのんびりとせずに仕事を探した方が賢明だったかもしれない。身体を動かすことだけ集中していれば余計なことは考えずに済む。そうやって日々繰り返し返していけばだんだんと忘れられることもある。時間の唯一のいい所はそれが誰にでも平等に流れる所だと私は思う。どんなに悲しい物事も確実に薄れさせる。それが時間の一番の効能だと信じてる。でもどうしてもそれをしようと思わなかった。した方がいいとは思った。でもしようとは思わなかった。どこへ行っても何をしても、この苦しみが一刻いっせきとも私からなくなることはないと思った。逃げられない、絶対に。それだけが確信として私の中に腰を据えていた。

ふとバナナをくれた人のことを思い出した。あの夜行列車の中で会った風変わりな人。旅慣れた感じの人だった。私はきっと他人から見ても「事情があるんです」と言わんばかりの顔をしていたのだろう。あの時は本当に自分と那智以外のことを考える余裕もなくてただ彼を親切だけど変な人だと思わなかったけど、今思えば本当に優しい人だった。本当に親切な人だった。ただ一緒に車両に乗り合わせただけなのに。それに、これも今思ったことだけど、もしかしたら彼と一緒にの車両に乗っていたから私は女一人でぼんやりと夜行列車に乗っていても何事もなかったのかもしれない。酷いことが起きる可能性だってあったのかもしれない。あの人は明らかにさりげなく私のことを気にかけてくれていた。声をかけてくるタイミングだって今思うと絶妙だった。

「そうだ。」

私は忘れていた。すっかり忘れていた。あのバナナの人がくれたメモを。確か電話番号が書いてあったはずだ。そうだ、あの町が故郷だと言っていた。

「確かここに……。」

私はあの時持つていったバッグを手に取った。帰って来てから放っておいたバッグはうっすらと埃がたまっていた。確かここについてるポケットに入れたはずだった。

果たしてそのメモはあった。あの時はちらと視線だけは落としたが全く目に入ってなかった。よく見るとそれは鉛筆で書いてあつて、ずっと小さく折ったままでいたので折り目に書いてある数字が薄れてしまい、その部分は読みにくくなっていた。紙全体が色褪せてぼやけていた。それは私を少なからず落胆させた。でもだからと言って私は何で落胆したのだろう？彼に電話することなどないのに。あの「親切」はあの時だけの親切だったはずだ。それ以上もそれ以下もないだろう。顔色の悪い、今にも線路に飛び込みそうにしている女がいたからちよつと気になつて気にかけてくれたのだ。

それでも私は落胆していた。おそらく……「自分以外の誰かが自分を気にしてくれている」という行為を私は思い出して、それがあつという間に自分の前を通り過ぎ、さらにそのことに気づかなかつたことに傷ついているのだ。でもそれに気づいたところでやはり私にはどうすることもできない。ただこうして見知らぬ人のかつての温かみを眺めるしか。

## 第27章・悶える鳥その15

私はもしかして視野が恐ろしく狭い人間なのかもしれない。

どうして那智以外の男性は浮かばないのだろう。どうして那智じゃなければいけないのか。

那智は私の男じゃなかったのに。もしかしてそうなんだろうかと、ふたりでいた頃から思っていた。それを思い浮かべては消し、いつか心の底に封印させていても、いつもそれを意識していたと思う。那智に私よりも優先する存在があるだろうこと。私だけの那智になる日は来ないだろうこと。それを・思い知らされる日がいつかは来るであろうということ。

あの人をあの人をあの人を・・・もう1度だけでいい、私の腕に抱けたら。そして叶うなら

あの人があの人があの人が・・・もう1度だけでいい、私の名を呼んでくれたら。

そして今私はこうして2度目の夜行列車の座席に座っている。まだ2度目なのに数回乗ったかのような感覚がある。外は暗い。身体は重く、動ける範囲の決められた狭いベンチと空間で、私の身のあちこちが軋んでいる心地だった。それはまるで走る電車の軋みと重なっているようだ。

痛い。ひたすら痛い。文字通り身も心も。どうして私はこんなに辛い思いをしてまであの土地へ行くのだろう。那智は私を待っていない。待つどころか私の存在さえないのに。あのココという少女も結局あれから一度も現れない。すべて、すべてが私を不在いないもの

にしてゆく。私は此処にいるのに。確かにいるのに。だからこそこんなに痛いのに。

だったら行かなければいいのだ。もつと楽に生きようとすればいい。それができない。那智がおそらく永遠に私だけの那智にならないと思いきらされた今でも、私は那智を求めている。那智と過ごした時間をただ過ぎ去っただけの思い出だけにしたくない気持ちが強すぎる。

その一方で私はわかっている。もうあの日々は戻ってこない。戻ってこないし繰り返されることもない。新たにあんな蜜月を紡げるはずはない。それはもう疾うにわかつていたこと。あの日、那智が私とのあまねく日々と別れる決心をした時に決まったことなのだ。・。私は何度も天秤にかけていた。もし、また那智が私とともに生きていく気持ちになったら。ふたりでこの列車に肩寄せ合って乗ることができたら。あの女性と少女よりも私を選んでくれたら。いや、那智が家族（だと思う）に捨てられることだってあるかもしれない。あの人たちが私と那智の間柄を知ったら。そしたら。・。そしたらもう一度。もう一度あの日々が来ることもないとは言えないのかもしれない。そんなことわからない。

でもどんなにかすかな可能性を考えてみても、私の不等号は孤独な結末の方が勝っていた。那智ともうお互いの身体を温めあうことのない確信をえていた。きっとこうなってもならなくても私は那智とは一緒にいられなかった。

私は窓の外を見る。暗い暗い暗い夜の果てを。トンネルも外も見えないものは変わらない気がした。硝子には虚ろな眼をした女の顔があるだけ。

ねえ、心漣。私は何処へ行くの？いつになったら本当の「そと」へ行けるの？どうやって行けるんだろうね？・・・多分それを見つめる為にこうしてるんだよね？那智に言ってもらいたくて。



第28章・悶える鳥その16―名無しの男の邂逅その2・

駅から出ると冷たい風が一気に頬を刺した。その冷たさは俺の胸の奥底の琴線までしつかり届き、思い出さないと決めた記憶まで鮮明に蘇らせた。

あの女の子のことは気にはなるが、ずっと見はっているわけにもいかない。バナナも食べたようだしメモも受け取った。本当に人間と交わることを拒む奴はどうアプローチしても無理な時が多い。そういう人間も見えてきた。だからまだあの女の子は安心できる。

俺にとっては旅が日常に近い。もうずいぶんの間どこか一か所に定住もしていない。多分俺は怖いのだ。どこかに定住することが。そして、他人という間柄の誰かとひとつ屋根の下に定住する間柄になるのが。そういうと、俺がまるで孤独を好んでいるように思われるのだがそうではない。独りの方が気楽だとは思っけど、孤独はごめん。あ、今で思い出したくない記憶が気配を醸し出してきた。もうやめよう。

とにかく俺は他人が思うよりは他人と接することが嫌いじゃない。だからあの女の子にも最初から声をかけた。様子をうかがいたいのもあったが……。若い頃はそういうことが頭で思ってもできないことが多かった。でも一度、やはり長距離の列車で、最初見かけた時から気になった女の子（助平心じゃなくて。様子がおかしいという点で）に声をかけず（それでも何となく見ていたのだが）、あげくの果てに死なれてしまったことがある。その子は一人であった。荷物も小さかった。彼女は事もあるうか自分が乗ってた列車が駅に停車中、反対のホームに入ってきた列車に飛び込んだ。

その女の子がどんな女の子だったか説明するのは無理。ただ小柄だったとしか覚えていない。そしてどことなく険しい目つきをして

いたとしか。今思えば、恐らく死ぬ決心をしていたのだろう。死ぬ  
為だけにその列車に乗り、その駅に降りたのだ。嗤笑的に走ってい  
る列車にホームから飛び込むなんてありえない。計画してたドラマ  
ティックな悲劇だったと思う。俺は確か座席で眠っていたが、外が  
やたらざわめき始めて目を覚まし、ホームを見て何かあったのを察  
した。と同時に同じ車両に乗っていた他の客が「自殺だ自殺。」と  
言いながら、迷惑そうに自分の場所に戻っていったのを見た。

「あの子じゃないよな？」そう思いながら（願いながら）列車の  
外に出た。人だかりになるほどの人の数はなく、駅員が一応見物人  
を遮ろうとするのだがその駅員も数がいなく、ズタズタのマネキン  
のような轢死体ははたして丸見えだった。血やら肉（？）やらが飛  
び散った惨状の中で幸いなことに彼女の顔はうつ伏せになっていて  
誰かから見えることはなかった。その光景は明らかに奇妙で違和感  
があつた。そのホームの向こうは死の世界だった。そういう匂いが  
した。目の前でそんなものを見ることは通常ない。誰かがすすり泣  
く声も聞こえた。それも不思議だった。何の為に泣くのか。自分の  
視野範囲でそういう思いがけないことに遭遇したことへのショック  
なのか。自分の人生でそういう場面に出くわしたことへの拒否心な  
のか。あの子は一人だった。どう考えてもその涙は彼女の為の涙じ  
やない。

俺ははげしく後悔した。やはり声をかけるべきだった。俺が声を  
かけたからといってどうにもならなかったかもしれない。決心した  
その覚悟を、知り合つたばかりの赤の他人で覆されるなんて話はテ  
レビの中だけだ。現実にはそれだけの覚悟を揺るがせることは、不  
可能とは言わないけどかなり厳しい壁だと思う。俺だって俺なりに  
覚悟を持って故郷を出たのだ。でもそれでもやはり俺は後悔した。  
後悔することでせめて彼女を忘れないようにしようと思った。俺な  
りの懺悔。死ぬことは止められなかったかもしれない。だけど死ぬ  
前にどんなに拙い拘りかかわりでも「いいことだつてあつた」と思わせるこ  
とができたかもしれない。それを届けられなかったことへの懺悔。

俺に出来る精一杯の親切があメモだけだ。あの女の子はこれからどこへ行くんだろう。どう見てもいい旅には見えなかったが。俺にとってもこの帰省は本当に正しいことなのかわからない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8991h/>

---

花を摘むひと

2011年11月11日21時22分発行